慈濟

ものがたり

コロナ禍の中で自力更生

モザンビークの大愛農場で豊作を迎え

●扉の言葉　文・證厳法師　訳・済運　撮影・蕭耀華

今生の人生を完成させる

真剣に生きて、真面目に時間を使い、
努めて福田を耕し、分秒をも無駄に過ごしてはいけません。
愛のエネルギーを奉仕し、
天地と人間（じんかん）に恥ずることがなければ、
今生の人生は完成されます。

慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】
教育における新しい方向　善耕／訳　4

【主題報道】
コロナ禍は教育・クラウドから学校に戻る　明陛／訳　8
コロナ禍で遂にやって来た…　惟明／訳　10
生活困窮家庭の子供の夏休み
大学生が家庭教師として付き添う　御山凛／訳　23
オンライン学習の「障壁」を取り除く　荳荳／訳　35

【表紙ものがたり・モザンビーク】
少しずつ力を出し合い
救済用倉庫がいっぱいに　葉美娥／訳　42

表紙

天災、戦争、そして疫病によって、モザンビークは食糧の供給が逼迫している。ソファラ州郊外にある大愛農場では、大衆が無償で農耕に従事し、７月に大玉のキャベツを収穫した。そしてこの１年間、各種の野菜を収穫しては１万世帯余りの貧困家庭に贈り続けた。（写真の提供・慈済モザンビーク連絡所）

【国際慈善・マレーシア】
互いに縁を大切にしてきた十七年　田中亞依／訳　55

【證厳法師のお諭し】
人生の価値を棚卸してみる　慈願／訳　60

【コロナ特別報道】
常に準備を怠らない慈善援助　江愛寶／訳　66
インド（下）
ひと呼吸の間にある命を救う　惟明／訳　74

【人物誌・厦門】
古稀に夢が叶う・慈済という「大学」で学ぶ　善耕／訳　86

【行脚の軌跡】
その地に立って天を頂く　済運／訳　100
十月の出来事　済運／訳　106

編集者の言葉

教育における新しい方向

◎訳・善耕

五月中旬から台湾全土でコロナ禍が深刻になってきたため、政府の実施した感染警戒レベル3は、七月下旬まで延長されていたが、その後やっとレベル2に引き下げられた。幸いこの期間中でも学校の授業は停止することなく、オンラインでリモート学習に切り替えることで、どの学年の学生も「登校はしないが、授業は続ける」ことができた。

コロナ禍の終息がまだ見えない中、このような授業方式が明らかに常態化していくとみられ、その影響で、少なからぬ生徒から教育を受ける機会を奪う可能性が出てきた。

世界経済フォーラムが発表したグローバルリスク報告書二〇二一年版では、ネットへの依存度が高くなるにつれて、国内または国家間の富貧の差がより顕著になり、インターネット使用に制限がある子供たちは、より深刻な教育の不公平に直面する恐れがある、と指摘している。

このようなネットリソースの不均衡な利用によって生じる「デジタルデバイド」は、地球規模の新たなリスクと見なされている。

台湾のワイヤレスネットワーク普及率は非常に高く、調査によると、インターネット環境のある家庭の割合は、八十パーセントという数字をこの九年間維持しており、偏境であっても相当水準に達している。しかし、コンピューター設備の不足という格差だけでなく、コロナ禍においてオンライン授業に参加もせず課題にも取り組まない「オンライン中退」の学生が出てきたことが今なお心配されている。

都会であれ偏境であれ、学生がスムーズにオンライン学習に参加できない主な理由は、家庭外からの支援体制の脆弱さである。経済的に弱い立場にある多くの家庭の子供にとって、学校の教師は、以前は指導と支援をする重要

な役割を果たしていたが、これら日常的なやり取りや精神的なつながりが、対面授業の停止で中断されがちになってしまったのだ。

今こそ、彼らにより多くの学習の機会を創出することが必要である。家庭訪問や電話インタビューを通じて、多方面から社会の慈善と福祉リソースを提供する時である。

今月号の主題報道では、慈済基金会が中古のコンピューターを募るだけでなく、さまざまな団体と協力して、恵まれない学生にネット環境のある設備を提供した話題が取り上げられている。「学生サポーターのオンライン学習伴走」プロジェクトは、オンラインプラットフォームと連携して、アルバイトで学費を稼ぐ必要のある大学生が、夏休みの間、オンラインで恵まれない小中高生に付き添って一緒に勉強するものである。

花蓮にある慈済大学附属中・高等学校の教師も、協働授業㊟中に創造性を発揮し、学生により深い学習体験を提供することに努めている。オンラインで授業をすることは試練でもあり、彼らにとっても改めて教育の本質と役割を考える機会となっている。㊟同じ授業時間に、異なる科目の先生が参加して協力しながら授業を行う。

科学技術を発展させる目的は、生活の改善と全人類の福祉の向上であり、人同士の不平等を深めてはならないはずだ。證厳法師はかつて、科学技術が智慧を発揮してこそ、慈悲を世に行き渡らせることができる、と述べたことがある。

それは「デジタル素養」の育成にも関連している。如何にして大海原のような情報の中から目的に合ったものを選んだらよいかを理解し、情報の信憑性を識別する力を身につけ、ネットの世界の潜在的な危険を回避しながら、科学技術に支配されないこともまた、教育の場に現れた新しい方向の重要課題だと言える。（慈済月刊六五八期より）

主題報道

コロナ禍は教育

クラウドから学校に戻る

◎訳・明陛

五月十九日、台湾全土で感染警戒レベルが3に引き上げられ、各学校は対面授業を停止した。その後四回の授業停止の延長を経て夏休みに入り、九月の登校まで先生と生徒は会うことがないまま、一つの季節が過ぎた。

夏休みまでの就学期間、子供たちは自宅でリモート学習をすることになり、オンライン授業が正式な授業形態になった。完備した設備のある子供は音声と画面で学習に参加できたが、兄弟姉妹全員で一つの携帯電話を使って、交替で授業を受ける子などは、デジタルデバイドの苦しみを味わった。教育関係者と慈善団体は多元的教学様式を創出して均等な教育を目指し、全ての子供が知識を追い求めることの楽しさを体験できるよう、努力している。

←5月18日の午後の下校時、台南のある學校の生徒が普段は教室に置いている教科書と学用品を箱詰めして、校門で迎えに来る保護者を待っていた。しばらく学校と離れ、再会したのはその4カ月後だった。（撮影・黄筱哲）

花蓮慈済大学附属中・高等学校

コロナ禍で遂にやって来た…

口述・李玲惠（慈済大学付属高校校長）訳・惟明
写真提供・慈済大学付属中・高等学校
インタービューと整理・張郁梵

新型コロナウイルスの感染拡大が、教育従事者に教育の本質と学校の役割を考え直す機会を与えた。教師たちは教えながら突破口を見つけようと試みた。生徒にソフトウエアの使い方を教えてもらうほど広い心で臨んだため、教育の純粋さと美しさがそこに現れていた。教師が生徒を導き、生徒が教師を導き、互いに影響し合う。これからの未来で、一層快適に生きていって欲しいと望む気持ちは同じなのだから。

台湾の教育部より、全国の学校は登校を停止してオンライン授業に移行するようにという発表があった時、私の脳裏には「ついにこの瞬間がやってきた」という思いが頭をよぎった。

突然、入った休校通知 六百人を帰省させるべきか、宿舎に留まらせるべきか？

五月十八日午後二時十七分、教育部長がＳＮＳで、台湾全土の学校を翌日から休校にするよう通達した。慈済大学附属中・高等学校（以下、慈大附中）の校内防疫チームは緊急校務会議を開き、校医、学校看護師、各学年主任とリーダーたちが集まって応急対策を検討した。そして五月十九日、台湾全土で警戒レベルが３に引き上げられた。

慈大附中は全寮制なため、その時の急務は寮生を寮に留まらせるべきかどうかを確認することだった。担当教師と教務課全員で取り組み、四時間という短時間内に集計した。その結果、全校生の約六割にあたる三百八十人が、県や市を跨いで移動するリスクを避けるために、学校に残ることを希望した。慈大附中の生徒は台湾各地から来ているため、帰省を希望した生徒のために、保護者にメールアンケートを送り、子供たちの到着駅を確認した後、教務主任と人文室の先生たちが十数万元（約三～四十万円）を立て替え、急いで駅に帰省するための切符を買いに行った。

五月十九日午前八時半、総務課の職員五人が車で十八人の生徒を駅に送り、他の生徒は学校が用意したバスで、九時過ぎの列車で帰省するために駅に向かって出発した。バスに乗る前、学校看護師と先生たちが全生徒の体温を測って、アルコール消毒をし、防疫措置で自分も他人

も守るよう、子供たちに念を押すことを忘れなかった。

ホームシックになった寮生

台湾全土で警戒レベル3が実施されてから、教育部は休校措置を四回も延長した。通知をもらう度に、学校側は保護者に子供を家に帰すべきか否かを確認した。先生が寮に来て列車の切符を配った時、「喜ぶ人もいれば、悲しむ人もいた」が、想像に難くない情景である。

帰省切符を受け取った生徒は、翌日の家族団欒に期待しながら荷造りをした。

しかし、寮に残る生徒の中には、故郷で感染者が出たため、両親が自分のことを考えて、止むを得ず「寮に残る」ことを決めた理性的な子もいれば、親に見捨てられたと感じた子もいた。そこで、教育部が初めて休校を発表した五月十八日の夜は、生徒たちの不安な気持ちを慰めるため、カウンセラー全員が寮に泊まった。

接触による感染リスクを抑えるため、教師自ら生徒を実家まで送った

政府当局が休校措置を六月十四日まで延長すると発表した五月二十五日、校内では防疫対策チームが早速、会議を開き、登校見通しが立たない状況下で、滞在している三百名余りの生徒を親元に帰すことを決めた。しかし、どのようにして安全な交通手段を確保するかが一大チャレンジであった。何度か討論した結果、保護者が迎えに来る生徒を除き、残り全

教育部（文部科学省にあたる）が「登校はしないが、授業は続ける」と発表した後、慈大附中では380名の中学生が寮生活を続け、9人の小学生が登校を選んだため、高校3年生と中学3年生が防疫の尖兵となって、後輩たちに感染防止対策を指導した。

員のためにバスを貸切り、「乗り換えなし」を原則に、帰省する子供たちの感染リスクを抑えることにした。保護者と相談の上、寮に残り続けたいという学生には、それを許可した。

観光バス会社の経営者の子供も慈大附中のOBで、学校が貸切りバスを必要としていることを知って、わざわざ最新の最もコンディションが良いバスを五台調達してくれた。出発前に二人の学校看護師が繰り返し車内を消毒した。五月二十八日の出発当日、バスは校門から出るとそれぞれ台北、台中、及び高雄に向かった。車内には教師が同行し、生徒を無事に目的地に送り届けた後、バスに同行した教師たちが花蓮へ戻る時のために、バスの後から別の教師が自ら車を運転して伴走した。

慈大附中というところは、教師たちがこぞってボランティアの仕事を取り合う学校である。今回のことで残業代を要求したり、ガソリン代を請求する教師がいなかっただけでなく、進んで任務を引き受けるスピードは想像以上だった。バスをチャーターすることを決めた時から、皆素早く手分けして任務を展開した。教務課と人文室は交通手段の問題を解決し、設備係は必要な生徒のためにノート型パソコンやタブレットを用意した。生徒送迎の件を聞きつけて、多くの教師がバスに同行することを志願し、バスに伴走する運転手の枠も直ぐに埋まった。

同行した教師によると、観光バスが各市の静思堂の前に到着すると、暑い日差しの下で慈懿会の保護者たちが既にバスを待ち、帰省する生徒を気遣っておやつ用意していた、とのこと。法師はいつも、子供の面倒をきちんと見

寮生がバスで帰郷した時、教員が各車両に同行して、それぞれ台北、台中、高雄に向かった。出発前、李玲惠校長が生徒たちを見送った。

るようにと慈大附中の教師に言い聞かせている。教師たちもそのことを忘れてはいない。このキャンパスでは、無私と志願が普通であり、この時も教師や職員はただ、生徒たちを無事に親元に帰すことだけを考えていた。

保護者が学習に付き添うだけでなく、校長先生がオンライン授業に現れた

教育部が休校を発表する前から、教師たちは事前に教材をオンライン用に作り換えたり、学習活動を企画したりして、準備を整えていた。一旦オンライン授業が始まると、私は、教師たちが生徒に対して細かいところまで気を配っていることに気がついた。

図書館員も教室の臨場感を増すために、わざわざチャイムを録音し、オンライン授業でも普段から聴き慣れたチャイムが聴こえるようにした。人文室は前の晩に静思語や心霊小語を用意し、各クラスの担任先生が毎日午前八時の「担任の時間」に利用して生徒たちと共有できるようにした。生徒たちを安心させるだけでなく、教師と生徒との絆を強くすることが狙いである。

「デジタル世代」に生まれた生徒たちに比べて、オンライン授業は、「ネット時代の新規参入者」である教師たちにとって大きなチャレンジである。幸いにも教職員は力を合わせ、自発的にＳＮＳ上でグループチャットを作り、出版社が無料で提供する動画ファイルや質の良いオンライン学習プラットフォームの情報を交換したり、授業中の問題の解決方法を一緒に考えたりするようになった。

また、生徒たちが授業に集中できないことがないように、オンラインでクラス巡回ができるシステムを作り、私（校長）や各学年主任が専用アカウントを通して授業参観できるようにした。ある英語の授業を参観した時の事だが、先生に名前を呼ばれた生徒に英文を読ませたが、私はヘッドフォンをして音量を大きくしても、はっきり聞こえなかった。そこで私はマイクを通して、「怖がらずに！英語は勇気をもって大声で読み上げるものです」と生徒を励ました。

時には私が出席をとって、画面で見えている生徒一人一人に名前を呼びかけている。私にとってクラス巡回は、生徒を叱るためのものではなく、もっと生徒たちと親しくやり取りをしたり、先生たちの授業状況を把握するためのものである。以前の私は生徒の顔と名前をつなげ

ることができなかったが、オンライン授業では生徒たちの画像に名前が付いているので、間違えることがない。これも意外な収穫だった。

オンラインでクラス巡回をすると、多種多様の画面に出会えるのが面白い。子供が自分の部屋で授業を受けると集中できないことを心配して、保護者は居間で授業を受けてさせているが、そうすると、生徒の後ろで洗濯物を畳みながら画面を見つめている母親の姿が見え、思わず戸惑うことがある。また、名前を呼ばれて問題に答えられなかった我が子の頭を父親が叩き、頭が傾いたところが画面に映って、クラス中で大笑いしたこともある。

「勉強の付き添い」をしている多くの保護者は、授業参観の感想を担任の教師にフィードバックしてくれる。毎日お孫さんと一緒に授業を受けている、ある文章がとても上手なお爺さんは、放課後に担任先生に学習日誌を書いていた。五月二十一日から終業式当日まで、一日も欠かさずに書き続けたので、お孫さんより

教師たちが総動員して、卒業証書や卒業アルバム、慈懿会の保護者たちが手作りした本、そしてPTAが用意したプレゼントなどを箱詰めし、学生一人一人の「卒業ギフト」を自宅に郵送していた。

対面授業が暫く中止になって、オンライン授業が中心になり、生徒のいない教室で教師が1人でコンピュータに向かって講義をしていた（写真上）。卒業式もオンラインで行われ、第19期卒業生が自宅で制服を着て、画面の前で先生と同級生たちに別れを告げると共に、お互いに祝福し合った。（写真左上と左下）

も真面目に授業を受けていたと言える。

コロナ禍で、教育に携わる人間として、教育の本質や学校の役割について考え直す機会を得た。学習環境が学校から家庭に変わったり、教育媒体がコンピューターに代わった時、如何にして学習を中

断させないようにするか？多くの教師は教えながら突破口を探り、中には生徒にソフトウエアの使い方を教えてもらうほど広い心を持つ先生もいる。私はそこに教育の純粋さと美しさを見た。教師が生徒を導き、生徒が教師に教えるように、互いに影響し合っている。これからの未来で、一層快適に生きていって欲しいと相手に望む気持ちは変わらない。

●

十八年前のＳＡＲＳの時の隔離経験があるため、慈大附中は今回のコロナ禍で、より高いレベルの防疫対策を取ることができた。寮生は毎日四回体温を測り、毎週金曜日の夜には学校がおやつを用意して各室に配り、外出禁止になっている生徒に和らいだ気持ちで週末を迎えてもらっている。コロナ禍でもこのような「伝統」があることを知った、ある高校一年の通学生は、寮に残ったクラスメートに何かしたいとの思いで、母親と一緒にタピオカミルクティーを作って、自ら学校に届けていた。

教育は影響力である。厳しいこのコロナ禍で、慈大附中の創立精神を守り、心を合わせて台湾全土で唯一無二の学校にしている教職員たちに、感謝したい。

（慈済月刊六五八期より）

生活困窮家庭の子供の夏休み

大学生が家庭教師として付き添う

文・廖哲民　訳・御山凛

慈済が推進している「学生サポーターのオンライン学習伴走」は、大学生にアルバイトの機会を与えると共に、生活困窮家庭の子供に学習リソースを提供している。三千人近い異なる年齢層の子供たちに付き添い、グループごとに学習している。お互いに夏休みを孤独に過ごす必要がなくなった。

台北市の路地にあるアパートの一室で、午前十一時過ぎ、「先生」と「子供」の話し声が聞こえてきた。

「今日は水資源について勉強します。さきほど観た動画をまだ覚えていますか？その中でどのような方法が節水に良いのでしょうか？」とパソコン画面の前で大学生の廖宇晴（リャオ・ユーチン）

さんが質問した。それぞれ花蓮、台東、嘉義、台南にいる六人の小学生と、オンライン授業ツールを通して環境保全と感染防止についての文章を一緒に読んだ。画面の向こう側にいるのは小学生だけではなかった。彼女のチームメイトで北市に住んでいる張以柔（チャン・イーロウ）さんも、恥ずかしがる子供たちに付き添っていた。

七月初め、二人とも初めて会う小学生にどのようにコミュニケーションをとれば良いのか分からなかったが、アイスブレイク（初対面の際に、緊張する場や雰囲気をときほぐす手法）という遊戯を通じて互いに親しくなった。皆で一緒に『歓迎されない見知らぬ来訪者』という絵本アニメを観賞し、生き生きとした物語から「コロナウイルスとは何か？」、「コロナウイルスはどこから来たのか？」について学んだ。そして、子供たちが自発的に発言できるように、動画を見た後、緊張感溢れるくじ引きや近頃取り上げられている時事ニュースを話し合い、家にいる子供が自分の考えを表現できるようにした。

私たちはこのプロジェクトを「壁のない教室」と称している。コロナ禍で人と人との距離が離れている中、テクノロジーを駆使し、境界を跨いで互いに協力することにより、長い夏休みの間でも情熱を持った純粋無垢な心を繋ぎとめた。

夏休み期間、学習能力が低下する

今年の夏、台湾全土の小中学生は新型コロナウイルス警戒レベル３の下で、在宅防疫措置として、「登校はしないが、学習は続ける」ことになり、在宅学習の自主性がより重要になっている。だが、夏休みに入って、学校のオンライン授業はなくなり、多くの生徒の学習能力も徐々に低下していった。

慈済基金会執行長室特別補佐の陳祖淞（チェン・ズーソン）さんの説明によれば、海外では「夏休みによる学力低下」という現象がすでに起きているそうだ。アメリカ・スタンフォード大学の研究によると、生徒はコロナ禍で登校できなくなってから、読む力の低下が３０パーセントという大幅な数字を示した。もし適時にサポートと付き添いをしなければ、生活困窮者家庭の子供の学力低下はより著しくなる。

親は失業により生計を維持することに精一杯で、子供の面倒を見る時間がなくなってしまった。以前は夏休みを利用し

「学生サポーターのオンライン学習伴走」プロジェクトとは、アルバイトを必要としている大学生が小学４年生から高校３年生に付き添い、自身に都合の良い時間帯にグループに分かれて生徒のオンライン学習のサポートをすることである。慈済ボランティアは、このプロジェクトの情報をケア世帯に伝えた。（上欄の写真　撮影・蕭耀華／下列の写真の提供・林宜儀／右の写真の提供・陳祖淞）

てアルバイトで生活費や学費を稼いでいた大学生も、コロナ禍でアルバイトが減ってしまった。人力銀行（台湾の求人サイト）の統計によれば、今年は９３パーセントの大学生が夏休み期間にアルバイトを計画していたが、彼らの思いとは裏腹にアルバイトを募集している企業や店舗は、３０パーセントにも満たなかった。

起伏の激しいコロナ禍では、支援活動を迅速に進める必要がある。六月中旬、慈済基金会執行長室王運敬（ワン・ユンジン）主任は、どのようにして子供の学力低下を防いだらよいのかを考えた。そこで、オンライン学習ツールを使って様々な業界と連携し、優秀な大学の大学院生と協力して、夏休みの間、生活困窮家庭の

コロナの影響で学習リソース不足や同級生に会えない日々が続き、生活困窮者家庭の子供は学習への挫折感や孤独感を味わいやすい。（撮影・葉晋宏）

小中学生の学習に付き添うという「学生サポーターのオンライン学習伴走」プロジェクトが誕生した。

真新しいオンライン学習サポート活動の情報は、台湾の大学や大学院教師と学生の間で瞬く間に広まり、「学生サポーター」の申し込みが始まるやいなや、五日も経たないうちに、七百人余りの応募があった。また「サポートを受ける生徒」には、オンライン授業が始まる前からすでに二千二百人の応募があった。これは今年の夏休み期間に台湾全土で企画された最も大規模なオンライン学習サポートプロジェクトである。

オンライン授業で言葉を発しない小学生

慈済に参加して二十五年以上になる新北市三重区ボランティアの徐秀梅（シュー・シウメイ）さんは、「学習サポートのアルバイト」をする機会があると聞くやいなや、十数年間付き添ってきたケア世帯に知らせた。「ケアを通じて、そのご家庭のお子さんが成長する過程を見守ってきました。国立大学に進学してとても優秀で、新芽奨学金（慈済の就学奨励制度）の支援も受けたことがありますから、彼らにも生徒たちの力になってほしいと思ったのです」。

七月五日、学習サポートが始まった。台湾各地で学生サポーターたちは面接と初期的な養成講座を受講した後、本格的にサポートを受ける生徒たちとオンラインで対面した。

徐さんの要請で応募した劉子菱（リウ・ズーリン）さんは、社会福祉学部を卒業したばかりで、ソーシャルワーカーの資

格試験の準備をしていると同時に、時間をやりくりして「学生サポーター」を務めた。彼女はチームメイトと一緒に六人の子供の学習をサポートした。だが、やり始めると容易なことではないことが分かった。「子供は時に、文章を見た途端、きちんと読まずにクイズのポイントだけを稼ごうとします。そのような場合、私たちは子供たちの視点に立って、読むことがいかに面白いかを知ってもらえるようにしています」。

マルチプレー型オンラインゲームが今の子供を惹きつけるゲームの主流であることを念頭において、今回のプロジェクトは、オンライン教育サイトのPaGamOと協力し、彼らのリーディング素養コースを使って、子供たちに文章を読んでからクイズを解いてもらい、一問正解するごとに一つの「土地」を取得できるようにした。「お城攻略」ゲームをするうちに、読んだ内容も子供の頭に入るのである。

毎回一時間半のやり取りで、各チームの学生サポーターは、子供たちの性格に応じて指導方法を調整している。サポートを受ける生徒からどうしても反応や返事を得られないなどの状況では、ベテランのチームに教えを請うことができる。彼らは慈青（慈済青年部）を卒業した現役教師や慈大附中（慈済大学附属中・高等学校）の教師、教聯会（慈済教師懇親会）の若いボランティアなどからなる百三十人の相談チームで、壁を感じた学生サポーターに、オンラインで教え方のコツをアドバイスしている。

7百人以上の国内外の青年が「学生サポーターのオンライン学習伴走」の学生サポーターに応募した。面接と説明会を経て、サポートを受ける生徒の学習カリキュラム内容に一層理解を深めた。（写真提供・陳祖淞）

グローバルに人材を集めて教育を行う

知らない同士が今は知り合いになっ

学生サポーターのオンライン学習伴走

期間 7月5日から8月28日まで

対象 学習サポートを受けた生徒は2,241人。小学生４年生から高校３年生。大多数が生活困窮家庭。学生サポーターは626人。ほかに82人のボランティアが参加。

頻度 週3回、毎回90分。あるいは週1回から3回を各自で選択可能。

カリキュラム
1. 対面式
2. オンライン学習サイト（例えばPaGamOリーディング素 養コース）または人文素養からテーマを選ぶ
3. サポートを受けた学生による分かち合いの時間
4. 家庭連絡簿で、今日学んだことを振り返る

相談チーム 教育に携わっている慈済ボランティアと慈済教育志業体関係者の計130人からなる相談チームで、オンライン授業のコツをアドバイスしている。

End Meeting

た。今はオンライン授業が始まると、子供たちは大声で「先生、こんにちは！」と言う。毎週空き時間を利用して一生懸命仲間たちとカリキュラムについてディスカションを重ねている廖さんの耳にその声が届くと、なによりほっとするそうだ。「子供が私たちにくれる『先生、ありがとうございます』の一言で、心が満たされます！」廖さんも、誰かのために何かできる人は最も幸せだと深く信じている。

王主任はこう説明した。「コロナ禍ではあらゆる支援行動が時間との競争です。夏期栄養支援プロジェクトやオンライン学習サポートなどは、どれも一カ月先に行うことはできず、また一週間後に先延ばしもできません。必要とあれば、その日に思考を巡らせ、計画し、次の日から持続性のある運営を進め、一週間以内に活動を始め、領域を跨いだ共同作業を始めるのです」。

王主任は、オンライン学習サポートを通して、生活困窮者の子供の孤独感を減らし、子供の学習能力をサポートできることに期待している。「一人の子供と触れ合う縁がある限り、その子の人生に善の種を植えることができるのです」。

学生サポーターによる学習支援計画が公表されてから、海外からもたくさんの励ましのメッセージが届いた。留学生や日本に定住している華僑が進んで日本語の翻訳を担当し、日本で学んだことを恩返しとして共有したい、と寄せた。また華僑の子女らに中国語を教えているイタリア人教師も、力になりたいと言ってくれた。これらのことにチームも触発され、将来は各国にいる慈済国際青年会の人材を投入して全世界で生活困窮家庭の子供をサポートするという考えに至った。「アメリカの子供が台湾の子供に英語を教

え、イギリスの子供が台湾の子供に科学を教え、台湾の子供がモザンビークの子供に中国語を教える…」王主任の説明によると、「これこそ法師が唱える『青空アカデミー』の概念です。このアカデミーは、大勢の愛の心を持った優秀な青年たちが一丸となってやる必要があります」。

九月から学校が始まっても、オンライン学習へのサポートは継続して行う予定である。インターネット技術の利便性は、従来の形が決まった実体活動の垣根を取り外し、異なる年齢層の学生が学んだことを分かち合うことができるようになった。また、生活困窮家庭の子供が在宅学習時に感じる孤独や挫折を和らげることにもなった。オンラインゲーム学習サイトPaGamOの創設者で台湾大学電気工学部教授でもある葉丙成（イエ・ビンチョン）氏は、以前「子供に学習の翼を与える」と言ったことがある。もしかすると、コロナが終息していない今、全ての子供に付き添いが必要なのかもしれない。子供たちに必要なネットワークとパソコンを提供し、更に必要な時に関心と付き添いを行うこと、それが子供の学習に必要な翼になるのではないだろうか。

（慈済月刊六五八期より）

福を惜しむ「愛」

オンライン学習の「障壁」を取り除く

良い仕事をしようとする職人が最初に道具を研ぎ澄ますように、中古コンピューターを各世帯に届けて設置する、ボランティアは「愛」で物の寿命を延ばしている。子供たちからオンライン学習による「障壁」を取り除き、学習格差を無くしたいがために。

文・廖哲民　訳・莨莨

慈済に参加して二十年という新竹のボランティア・彭瑞芬（ポン・ルィフェン）さんは、毎月訪問チームと一緒に尖石郷に赴き、海抜約三百～六百メートルの新楽村と義興村を訪問して、ケア世帯の生活に関心を寄せている。

台湾の学校は、五月中旬から深刻化したコロナ禍で、「登校はしないが、授業は続ける」ことになった。学期中はほとんどの学校で、必要とする生徒にタブ

レットを貸し出すことができた。しかし、一部の生徒はまだ携帯電話でオンライン授業を受けていたり、インターネット接続に問題がある世帯もあった。しかし、夏休みが始まると、タブレットやノートパソコンなどは全て回収された。ボランティアが長い間世話してきた尖石郷の生徒は、普段から宿題を見てくれる親もいない中、サマーキャンプも中止となり、どうやって長期休暇中、学習習慣を維持すればいいのかが問題となった。

彭さんは、「学生サポーターのオンライン学習伴走」というコースがあることを知ると直ぐに、ケア世帯の子供たちに紹介した。「彼らはとても興味を持ってくれたのですが、携帯電話の小さな画面で授業を受けている子どもがいると聞き、心が痛みました」。

ノートパソコンをどのように手に入れるか考えあぐねていた時、いつも新竹のリサイクルステーションでコンピューターや音響設備を補修していた、ボランティアの劉千徳（リウ・チェンドー）さんのことを思い出した。彼はよく中古パソコンや部品を修理して使えるようにし、夏休みを迎える前には準備を整えて、中古パソコンを修理して待っていた。見た目は古いが、中のハードディスクとソフトウェアは更新してある。新竹の訪問ボランティアチームは、この縁を活かして困っている子どもたちにパソコンを届け、支障なくオンラインで学べるようにした。

窓越しに世界を見ると、尖石はさほど遠くない

卒業を間近に控えた中学三年生の鍾君は、母親の健康状態が思わしくなく、六

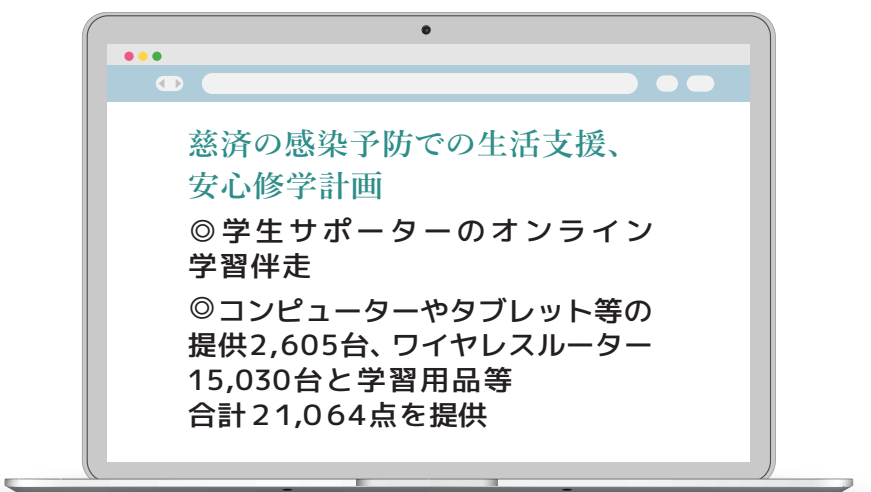
新竹の慈済ボランティア・彭瑞芬（右1）さんらは、尖石郷の山間部に赴いて学生のために中古のパソコンを設置し、オンライン学習の状況について関心を寄せた。（撮影・李侑臻）

月末には高齢の父親も入院し、親孝行な彼は病院で父親の看病をしていた。彭さんは彼が高校進学の準備をしていることを知っており、勉強を中断しないことが大事だったため、母親と相談した結果、父親の介護者を雇うために経済的な支援を申請することにした。そしてすぐに、「学生サポーターのオンライン学習伴走」に申し込み、同年齢の学生と知り合うことで人文素養を身につけることにした。

家族が住んでいたブリキ屋根の家にはパソコンもインターネット環境もなかった。七月初旬、彭さんは劉さんに連絡を取って、一緒に尖石に行き、中古パソコンとスピーカーなどを設置し、鍾君に使い方を教えた。全て整うと鍾君は、「オンライン学習は大好きです！」と喜んでくれた。それに、自分からもっと授業の時間を増やしたいと伝え、週一回病院で授業を受けていたのを、自宅で週三回にした。

彭さんは、彼がオンラインで「サポーターの大学生」や同級生と交流し、一時的に介護者の役割から離れて楽しく学んでいる姿を見ると、とても安心した。「私は、原住民部族の子どもたちが他の子どもたちと交流できるようになって、視野を広げて、世界がどれほど大きいかをぜひ知って欲しいのです！」また鍾君は、ボランティアに心から感謝の手紙を書いた。「僕を小学校の時からサポートしてくれてありがとうございます。今、僕は高校生になろうとしています。あなた方がいなければ、ここまで続けて来られることができたがどうか分かりません」。

もう一つの案件は、小学校六年生の女の子で、家を空けることが多い母親の代わりに二人の弟の世話をしていた。彼女は、彭さんから「学生サポーターのオンライン学習伴走」のことを聞いて、自主的に携帯から申し込んだ。彼女の家に設



（2021年8月15日現在）

備がないのを見て、劉さんは急いで中古パソコンを修理し、この家を訪れて設置した。山道を片道一時間もかかったが、ボランティアは遠いことを厭わず、何度も行き来した。「子供の教育に待ったなし」だからだ。

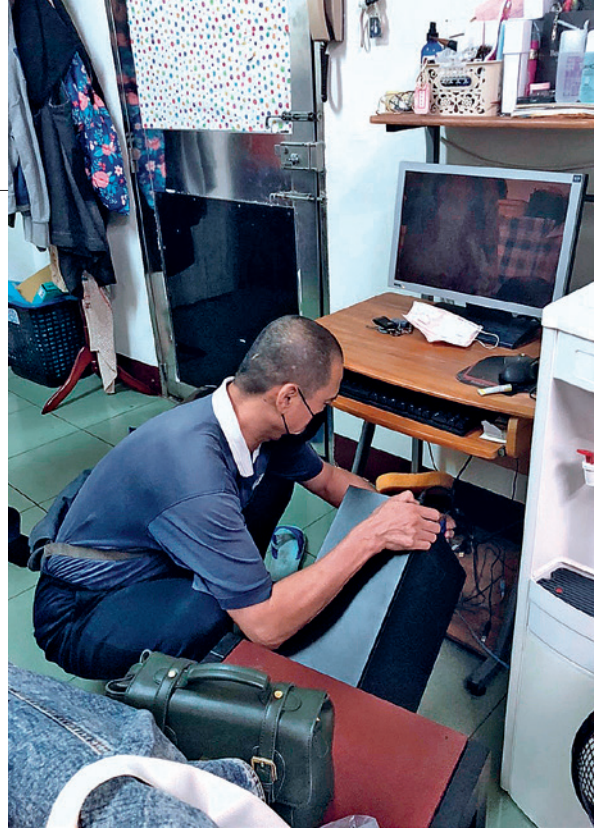
物の寿命は再生できる 大事に使えば役に立つ

新竹の子供たちに中古パソコン設備を支援し、「呼び水」の役割を担っている彭さんは、心から「物を大切にする」概念を子どもたちと分かち合った。新品だけが使い易いのではなく、優れた学習ツールとして正しく使用することが重要なのだ、と。実際は多くのパーツは新品で、「私が使っているパソコンよりも速度が速いのです！」

パソコンの修理を担当する劉さんは、仕事の合間にリサイクルステーションを片付けたり、他のボランティアの家から古いパソコンを回収している。まだ使えるものもあり、長く使っていないだけで、何台かの部品を組み合わせ、故障した部分を修理してから、新しいハードディスクを取り付ければ、設備がなくて困っている家庭は、新しい一歩を踏み出すことができるのだ。

山奥から市街地まで、ケアの歩みは流れ続ける川のように途絶えることなく、困っている家庭へと続く。ボランティアが物の寿命を延ばして再利用する行動が、慈善と環境保護という善の循環を促すと共に、子どもたちのデジタル格差を埋め、学習に支障が出ないようにしている。

（慈済月刊六五八期より）



情報機器関係の仕事に従事している劉千徳さんは、通常、慈済の活動では音響操作の担当をしているが、以前から廃棄されたパソコンを修理しては、必要としている子供たちに届けている。（撮影・陳淑娟）

表紙ものがたり・モザンビーク

少しずつ力を出し合い 救済用倉庫がいっぱいに

文・葉子豪　写真の提供・慈済モザンビーク連絡所　訳・葉美娥

天災と戦乱の上にコロナ禍が重なって、モザンビークは国連世界食糧計画（WFP）では最も食糧危機が深刻な国の一つに挙げられている。幸いにも、中部ソファラ州郊外にある大愛農場が、収穫の恵みを町や村の困窮世帯に分け与えた。人々が少しずつ力を出し合うことで、一年間に延べ一万世帯余りを支援し、食糧不足の危機を緩和させてきた。

被災して支援を受け、恩返しに食糧を寄贈

多くの人は、アフリカは長年にわたって飢饉と戦乱に苦しむ「暗黒の大陸」だという既成概念を抱いている。UN（国連）という字が書かれたベストとNGOの制服を着て米などの食糧を携えてくるヨーロッパ人やアジア人と、それを受け取るために長い行列を作るアフリカ人女性との明確な対比は、「施しをする側」と「受ける側」という立場を象徴している。

●メトシェラの3つの大愛農場は、毎月異なった農作物を収穫している。ボランティアが5月に種を蒔いたレタスは、2カ月後に収穫され、貧しいケア世帯に届けるのを待つばかりだ。

しかし、モザンビークのソファラ州では、その既成概念を覆す光景が見られた。村や集落ではボランティアベストを着ていたのは現地の住民であり、苦労して収穫した野菜を丁寧に梱包して出荷し、そして再会した時、今度は支援を受けた母親たちが手に一皿ずつトウモロコシ粉を持ち、列を作ってその大事な食糧を大きな樽に入れ、それからコインや小銭を取り出して竹筒貯金箱に入れていたのだ。

「彼女たちは救済される立場ではないのですか？」とモザンビークの苦境を知っている人たちは、当然のように疑問を持った。それは、ソファラ州の位置するモザンビーク中部が、二〇一九年三月にはサイクロン・イダイによって甚大な被害を受け、二〇二〇年暮れから二〇二一年にかけてはサイクロン・シャレーンとサイクロン・エロイーズに相次いで襲われたからだ。また、北東部の沿岸地帯は過激派組織の襲撃に遭い、首都マプト（Maputo）のある南部地域では干ばつが起きていた。

天災と戦乱に目に見えない新型コロナウイルスの感染拡大が重なり、人々の生活は深刻な打撃を受け、百万以上の国民が飢餓の脅威に晒されている。国連世界食糧計画（ＷＦＰ）は、モザンビークを食糧危機が最も深刻だと危惧される国のリストに載せており、今年から八カ月に及ぶ長期食糧援助プロジェクトを展開している。年の初めには中部でサイクロンによる水害が発生したので、避難を強いられた被災者は、食糧不足とコロナ禍の中で苦境に陥り、生活が更に厳しくなっていた。州政府から慈済基金会と他のＮＧＯに緊急支援の要請があったことから、慈済は長期支援しているニャマタンダ郡の三つの村を受け持って今後も貧困支援と配付を行うことにしている。この三カ所は即ち、大愛農場のある所である。

今年七月、サイクロン被害の後、メトゥシラ、ニャマタンダ、ラメゴの三つの町村で、二千五百三十七世帯を対象に、一世帯当り二十五キロのトウモロコシ粉と十キロの米及びピーナッツ、豆類、油、塩、石鹸など総重量五十一キロの物資を配付した。

現地ボランティアは、住民たちに食糧や種を提供するだけでなく、農耕知識を伝授し、自力更生と相互扶助、布施利他という概念を教えた。被災者はその段階ではまだ支援が必要だったが、慈済基金会設立当初の「竹筒歳月」精神を理解しているため、実際の恩返しを行動で表す

ことで、アフリカ人自身による慈善の歩みが始まったのである。

恩恵を受けた人の中で延べ二百二十九人が、自主的にトウモロコシ粉で恩返しを行い、その重さは三百四十四キロに達した。ボランティアはそれら寄贈物を更に二百十四世帯の支援に回した。その時は、支援をできるだけ広い範囲に拡大するために、一世帯に一キロちょっとの配付でしかなかったが、自身が長年困窮してきた住民にとって、この一歩を踏み出すことは簡単ではないはずだ。

●大愛農場のボランティアは、強い日差しの下で大きなキャベツを収穫していた。そこでは農薬や化学肥料は使われておらず、野菜一つ一つはボランティアが交替で植え、運んできた水で灌漑して育てたものである。

千人が灌漑し、共に福田を耕す

「人と土地さえあれば生産できるのです。貧困救済を始める時には、先ず人々のお腹を満たすことが大切です。そして、畑仕事でも仏法を伝授できるのですから、善人と良田があれば、良い成果がもたらされるのです、と證厳法師はおっしゃいました」。モザンビークに嫁いだボランティアの蔡岱霖（ツァイ・ダイリン）さんは、夫のディノさんと共に證厳法師の教えに追随して、二〇一四年に首都マプトにある「慈済の家」の裏の土地に、貧困救済のため、野菜を植えることを現地ボランティアに呼びかけた。この、土地の善用による「マンゴーの樹の下の道場」では、仏法の勉強会も行った。

二〇一九年サイクロン・イダイの災害の後、マプトのボランティアたちは、農耕による貧困救済と農場兼道場の運営方式を中部ソファラ州のメトゥシラ郡にもたらした。慈済は現地で二ヘクタールの土地を見つけたが、その慈善農耕に呼応してくれた住民は千人あまりもいた。

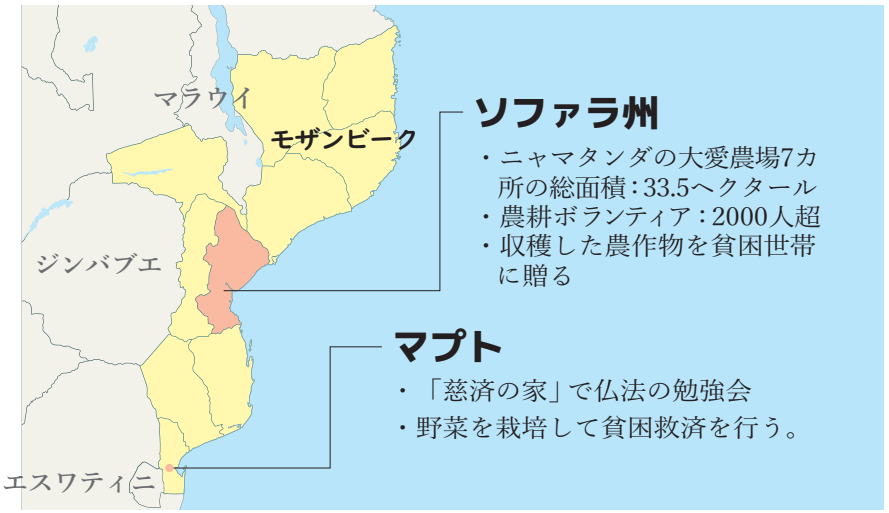
住民が勤勉に耕した農場は、二〇二〇年四月にモザンビーク政府が新型コロナウイルス拡大によって緊急事態宣言を発

令した後、恵みの雨のような効果を発揮することができた。大愛農場の収穫は、防疫措置で失業し、都市から故郷のメトゥシラに戻らざるを得なかった人々の飢餓を救った。

「農場の千人余りのボランティアは、皆メトゥシラの部落から来ており、どこに貧しい人がいるのかよく知っています。毎回収穫が終わると、トマトと野菜を入れた籠を持って、最も貧しい家庭を一軒一軒訪問して届けるのです。十月末までに延べ三千六百人が恩恵を受けました」と、かつて長くモザンビークに住んでいた慈済人医会ボランティアの龍嘉文医師が語った。

大愛農場の成功は、現地ボランティアを大いに励ました。また、新型コロナウイルスの感染拡大後、各国がウイルスの蔓延を防止しようとロックダウンや鎖国を行ったため、モザンビークは隣国南アフリカからの食糧輸入が途絶えて物価が急上昇し、輸入に頼っていたデメリットが顕著に表れ、自給自足の重要性がことさら指摘されるようになった。

今年三月、現地ボランティアはソファラ州で大愛農場の運営を拡大しようと決め、地元の善意ある地主たちと積極的に連携して福田にできる場所が他にもないかと探した。メトゥシラでは最初の大愛農場を含めて、すでに三カ所の農地で生



産が始まっており、その他、ニャマタンダとラメゴでも二カ所の農地を借りることができた。今年の八月までの統計では、ソファラ州で七カ所、総面積は三十三・五ヘクタールに拡大し、それはサッカーコート四十七個分の広さに相当する。

気候から言うと、現地の雨量は台湾より少ないわけではない。ただ雨季と乾季がはっきり分かれているので、農業用水は天に頼るほか、乾季には人力で井戸や川べりから水を汲んでくるしかないのだ。

「私たちは二千人余りの水運びボランティアチームを組織しました。みんなで順番に井戸や河辺に水を汲みに行きます。実

に多くの人力によって成り立っているのです」。

大衆の善意によって、荒廃していた土地は豊かな大愛農場に変わった。ボランティアは何を植えたらいいかと農作物の種類を前もって計画し、住民のお腹を満たすだけでなく、栄養についても考慮している。現地では欠かせない主食であるトウモロコシのほかにも、カボチャ、トマト、サツマイモの葉などには人体に必要なビタミンが豊富に含まれている。ピーナッツは豊富な油のほか、證厳法師の教えに呼応する意味もあって、肉食から菜食に切り替える人たちに植物性たんぱく質を補完することができるのである。

「トウモロコシ粉は多くの人のお腹を満たすことができるので、ボランティア

●メトゥシラ大愛農場のボランティアは皆、地元の人で、何処に独りで孫を育てているおばあちゃんがいて、どの世帯がシングルマザーか、などをよく知っており、ボランティアが一軒一軒野菜を届けている（写真下）。農場の収穫作物は種類が多く、今月はキャベツとレタスだが、来月は豆、トウモロコシ、キュウリ、トマトなどに変わり、ケア世帯はいつも次の野菜は何だろうと楽しみにしている（写真右）。

が天日で乾燥させたトウモロコシを粉にする前に、いつも歌を歌ったりダンスをしたりして、豊かな恵みに感謝しています」。蔡さんは、ボランティアの豊作の喜びをこのように伝えた。

慈善農耕で飢饉をなくす

今年七月国連世界食糧計画（ＷＦＰ）サミットの予備会議において、蔡さんがモザンビークでの慈済志業の成果について報告した時、特別に教育の重要性を強調した。「私たちは農閑期に『教育』の仕事を行い、知識だけでなく、道徳、正信や正念なども教えています」。

蔡さんは大愛農場の例をあげて説明した。もし慈済が住民に、互いに助け合う道理を教えていなかったら、本来貧しい人を支援するはずの作物を家に持ち帰ってしまい、互いに奪う可能性もあったのだ。そうなると農場は経営が続けられなくなり、貧しい状態が改善されることはなくなるだろう。

「もし私たちが互いに助け合えば、生活がこれほど苦しくならなくて済むはずです。『見返りを求めない奉仕』をすることは、彼らにとっては非常に難しいかもしれません。しかし、今日自分が人を助ければ、いつか助けが必要になった時、誰かが自分を助けに来てくれる、という道理を、彼らは理解しています」。

そのように自利利他の道理を理解し、人助けの喜びを感じている村人たちは、喜んで月に何日かの時間を割いて大愛農場で耕作や水やりに奉仕しているのである。労力や時間を奉仕している人にとって、生活の妨げにならないほど

●サイクロン・エロイーズの被災者は、農作物の収穫前である今年7月に、慈済のトウモロコシ粉などの物資を受け取った。その後、皆がそれぞれ恩返しとしてトウモロコシ粉を持ち寄ったので、慈済の手で、より貧しい2百世帯余りに贈られた。

の短期間のボランティア活動であっても、一粒一粒の米が籠いっぱいになる効果には目を見張るものがある。現在七カ所の大愛農場の中で、メトゥシラの三カ所は既に貧困救済活動を続けており、収穫した各種の野菜はこの一年間、延べ一万世帯余りの貧困家庭に贈られてきた。

蔡さんによると、これから農業の専門家を招いて農耕技術と管理を指導してもらい、将来的に青果卸売市場を立ち上げ、現地の小作農に作物販売を指導することも考えている。また、ソファラ州の農業用水の不足と灌漑問題について、「慈済が中国甘粛省で行ってきた水がめ作り、あるいはジンバブエでの井戸掘削の経験を取り入れてはどうか」と模索している。

大愛農場の慈善農耕では、アフリカ人の愛と智慧、願力が、ユーラシアとアメリカの人々のそれと何の差もないことがすでに證明されている。見るからに立場が弱くて助けを必要としている人たちでも、同様に良能を発揮して他人を利し、人間として生まれた意義と尊厳をこの人生で表すことができるのである。モザンビークの現地ボランティアの努力が実を結び、そのことを最も良く証明している。

（資料の提供・龍嘉文）（慈済月刊六五八期より）

国際慈善・マレーシア

互いに縁を大切にしてきた十七年

十七年来、アムさんにとっての身内は慈済のボランティアたちであった。ボランティアが彼女の遺品を整理していた時、大事に保存していた一緒に撮った写真を見て、お互いにこの縁をどれほど大切にしていたかを感じた。葬儀と火葬ではやはり慈済ボランティアが側にいて最後を見送った。

文・覃盈瑩（マレーシア慈済ボランティア）
撮影・廖昌豪（マレーシア慈済ボランティア）
訳・田中亞依

慈済ボランティアは、十七年前にアムさんと初めて出会った日のことを今でも覚えている。彼女は少女のように恥ずかしそうに片隅に座り、ボランティアとお兄さんの話を聞いていた。慈済が彼女たちに生活支援を初めて二カ月後、アムさんのお兄さんが亡くなった。彼女は家族を失い、途方に暮れたが、ボランティアは彼女に家族同様の愛で接した。毎回彼女を訪問した時、アムさんは

いつもボランティアの頬にキスしたり、顔を撫でたりして、まるで帰って来る子どもたちを待っている母親のようだった。

マレー半島南部ジョホール州の丘陵にある町、クルアンで慈済がボランティア活動を始めてから、既に二十年以上になる。二〇〇四年、報告を受けて、ボランティアがミナチさんの家にやって来た。彼女は伝統的なインド系マレーシア人の女性で、内向的な性格の彼女は、人と接する機会も少なく、家族とだけで生活していた。慈済ボランティアたちは親しみを込めて、彼女をアムさんと呼ぶようになった。

末っ子だったアムさんは、父や母、兄に可愛がられて育った。両親が他界した後、独身だった彼女は、離婚して子どもがいなかったお兄さんと二人で支え合って生きてきた。お兄さんは安定した収入があったため、彼女は家事に専念するだけでよかった。しかし、二〇〇二年、お兄さんは脳卒中で倒れて、働くことができなくなった。五十五歳のアムさんは、それまで社会と離れた生活をしていたため、外に出て職に就くことは難しく、兄妹は政府からの補助金と兄の教職員救済金に頼って生活するほかなかった。しかし、倹約しても日々の生活は苦しく、見

るに忍びなかった友人たちが慈済に助けを求め、ボランティアが二人の生活に関わるようになった。

アムさんは自分も困っている人を助け、社会に恩返ししたいと思い、毎月ボランティアが訪ねてくる日には必ず、財布から五リンギットを出して寄付し、慈済のリサイクル活動にも参加した。長年にわたって、慈済のチャリティーバザーや大規模イベントにはアムさんの姿があった。

二〇二〇年十月初め、ボランティアが

●アムさん（中央）は慈済クルアン事務所からの招待で歳末配付活動に参加し、ボランティアたちと「家族写真」の記念撮影をした。

いつも通りに彼女を訪ねると、近所の人からアムさんの様子がおかしいと言われた。急いで病院に連れて行き、検査すると、脳卒中だと診断された。既に会話や食事に影響が出て、自分で身の回りのことをするのが困難になっていた。一週間後に退院して家に帰ると、彼女はボランティアたちの名前も忘れがちになっていて、慈済ボランティアだということだけは分かっていたので、家に迎え入れた。

ボランティアたちが介護施設を探し、アムさんは介護が受けられるようになった。二〇二一年一月四日の夕方、ボランティアの覃盈瑩（タン・インイン）さんは、介護施設の院長からの電話で、アムさんが昏睡状態であることを告げられ、病院で治療するかどうかを聞かれたので、直ぐに救急車で病院に搬送してほしいと伝えた。約一時間後、再び電話が掛かって来て、搬送中にアムさんの呼吸が停止したという知らせが来た。

突然の訃報を受け、覃さんは悲しみにくれた。病院に向かう道中で生前のアムさんとの思い出や交わした言葉が次々と脳裏に浮かんだ。一年余り前、インドの重要なお祭りであるディパバリ前夜に彼女と一緒に墓参りに行き、お母さんやお兄さんに祈りを捧げたことを思い出した。また、つい最近、ボランティアが供え物を持って介護施設にいるアムさんを訪ね、一緒にディパバリを祝ったばかりだった。

ボランティアがアムさんの遺品を整理していた時、ここ数年間に参加した慈済の歳末配付活動でボランティアたちと撮った集合写真を大切に棚の上に飾ってあったのを見つけて、彼女がこの縁をとても大切にしていたことが分かった。

七十二歳のアムさんには肉親がいなかったため、ボランティアは警察に葬儀の申請をし、三週間後に許可が降りて、ようやく執行者として書類にサインし、アムさんの遺体を病院から火葬場へ運ぶことができた。インド系葬儀会社を経営するアルミー・ラージャさんは、肌の色の異なる団体が家族のようにアムさんの葬儀をしていたことに非常に感動し、一緒に善行したいと申し出て、無償でアムさんの葬儀を引き受けてくれた。

一月三十一の夕方、ボランティアたちはインドの風習に則って、アムさんの遺灰を抱えて川べりまで行くと、生け花と牛乳をふりかけて河に蒔いて無事葬儀を終えた。ボランティアたちは河の流れをじっと見つめ、合掌して彼女を祝福した。

（慈済月刊六五三期より）

【證厳法師のお諭し】

人生の価値を棚卸してみる

◎訳・慈願
絵・林順雄

今日一日、社会に対してどれだけの時間をさいて尽くしたか、歩いてきた生涯の道は一歩一歩が穏健着実だったか、と反省してみましょう。人生の棚卸しをすると、足跡のある人生はとても価値があります。

ハリケーン・アイダが八月下旬、アメリカ南部と東海岸を襲いました。どんなに高度な技術で建てられた大都会の建物といえど、暴風と大雨には耐えられず、滝のような雨が壁を突き破り、家々を破壊しました。ボランティアたちがお互いに無事を確かめ合うと、被害調査と配付活動を始めました。東海岸だけでなく、西海岸のカリフォルニア州の森林火災は延焼を続け、周辺の州にまで燃え広がり、ボランティアは休む間もなく関心を寄せています。

大自然の気候不順によって、水害や火災が多く発生しています。《法華経》に「三車火宅喩」という話があります。長らく修繕していない古い家が火事になり、中には愚かな子供たちが遊びに夢中で、逃げることを知らず、楽しそうにしていました。長者が家の外から逃げるよう叫び続けると同時に、玩具を一杯載せた羊車、鹿車、牛車で誘い出し、やっと子供たちを危険から脱出させることができました。

遊びに夢中になっていた子供たちは慈父の声も聞こえず、ただ迷い、火遊びに夢中になっているのが、現在の人類の様子です。欲するがままに放任し

ていると、無明は燃え盛る火のように、或は全てを覆いつくす洪水のように、人口の増加に伴って地球の破壊は加速し、災害は益々強度を増しているのです。しかし人々はこの火宅の中で自分を見失い、環境がすでに危機に瀕していることに気がついていません。

世の中でこれほど多く発生している地、水、火、風による災害で明らかです。人々はどういう生活をして、長期にわたって汚染し続けて来たか。それで大自然が逆襲に出ていることに想いを至らせるべきです。大いに目覚め、覚悟して、日常生活の中で用心しなければなりません。悪念が起きて、間違った行動をすれば、悪業は増えます。直ちに果てしない欲の門を閉ざし、善の扉を開け放し、時間と争ってこの世を利し、愛の力でもって奉仕することです。一人ひとりの善が集まって積もれば、最も平安で幸せな世になります。

八月十四日、ハイチで発生した強い地震は、台湾の九二一大地震に近い規模で、二千二百人余りが亡くなり、一万人以上が負傷し、被災地は目も当てられない程、家々が損壊しました。現地社会は不穏でなす術を知らず、慈済人は支援に到着したものの、人力支援も物資の支援も今までにないほどの困難に直面しました。

アメリカ慈済は人員を動員して緊急支援を行うと決めたのですが、世界中がコロナ禍でロックダウンや国境封鎖で感染拡大を抑えており、ボランティアが国を越えて配付活動をするのはとても困難でした。数人のアメリカのボランティアが二回のワクチン接種を終えてから支援に向かい、現地人ボランティアと合流して活動を行いました。その中の一人、陳健（チェン・ジェン）さんはハイチを七十九回も往復し、十数年にわたって現地人ボランティアを募って来ました。彼は七十歳を越え、アメリカで快適な暮らしができるのですが、ハイチで困難を排して長期間、現地を護って来ました。

数多くの物資を百キロ先の被災地に運ぼうとしても、動乱で危機に満ちているため、今日のボランティアは明日のことは知れず、次の一瞬がどうなるかも分かりません。心は焦っていましたが、そこで配付活動を完遂させることを心に決めていました。衆生が苦から逃れ、誰もが心身ともに平安自在であることを願うのが菩薩の任務なのです。菩薩は人間（じんかん）に幸せを

もたらすだけでなく、それ相応の智慧と才能があって初めて人々と縁を結ぶことができ、煩悩無明に染まらぬよう自分を鍛えて、力を発揮できるのです。

ハイチ人は長年の困窮と今回の災害が重なり、慈済人は災害支援をするだけでなく、現地ボランティアを養成して、現地の人に多く参加してもらい、愛のエネルギーを育まなければなりません。現地人菩薩が速やかに苦難の人たちに手を差し伸べ、社会に善人が多くなってこそ、未来に希望が持てるようになるのです。

人生をぼんやり過ごすのが凡夫です。心して「学び」、「目覚め」、「道理が見える」子供になるべきで、火宅の中で遊び呆けている子供になってはいけません。目を大きく見開いて道理を見つめること、即ち、「明心見性（目覚めた心で自分の本性を徹見すること）」です。人には皆仏性が備わっており、ブッダが如何にして、衆生に接して来たかを学ぶのです。つまり、世間の苦や煩悩無明の多いことを目の当たりにし、自ずとして憐憫の心が起り、「私が正しく、彼が間違っている」という考え方から脱し、人生であってはならない煩悩を二度と作らないことを決めたのです。

娑婆の世界は菩薩を必要としており、菩薩になるために、皆が八識田を聞いて、第九識に至り、清浄無垢な仏性を持った慈悲心を啓発し、喜んで世の苦難に喘ぐ衆生に尽くし、「喜んでやります」と言えるようになるよう、絶えず、法師は呼びかけて来ました。

慈善の仕事は配慮が行き届いていなければならず、実に大変な苦労です。しかし、皆は苦労と言わず、幸せだ、と言います。なぜなら幸福な人生だからこそ世の中で苦しんでいる人たちに奉仕することができ、心をこめて参加できると共に、素晴らしい体験を自分の人生に書き留めることができるからです。これほど多くの苦難を目にし、生命には決まった長さがなく、呼吸の合間にあるという道理を悟っているのです。今日は世の中のためにどれだけの事をしたかを反省すべきです。この生涯が穏健なもので、一歩一歩地に足を着けて歩んできたでしょうか？もし過ちがあれば、直ちに改めるべきで、懺悔すれば清らかになれます。日々自分の人生の棚卸しをして、一分一秒を把握して、価値のある人生になるようにするのです。

（慈済月刊六五八期より）

コロナ特別報道

変異株が主流になり、世界のコロナ禍がリバウンド

常に準備を怠らない慈善援助

文・顔婉婷（慈済基金会文史処職員）　訳・江愛寶

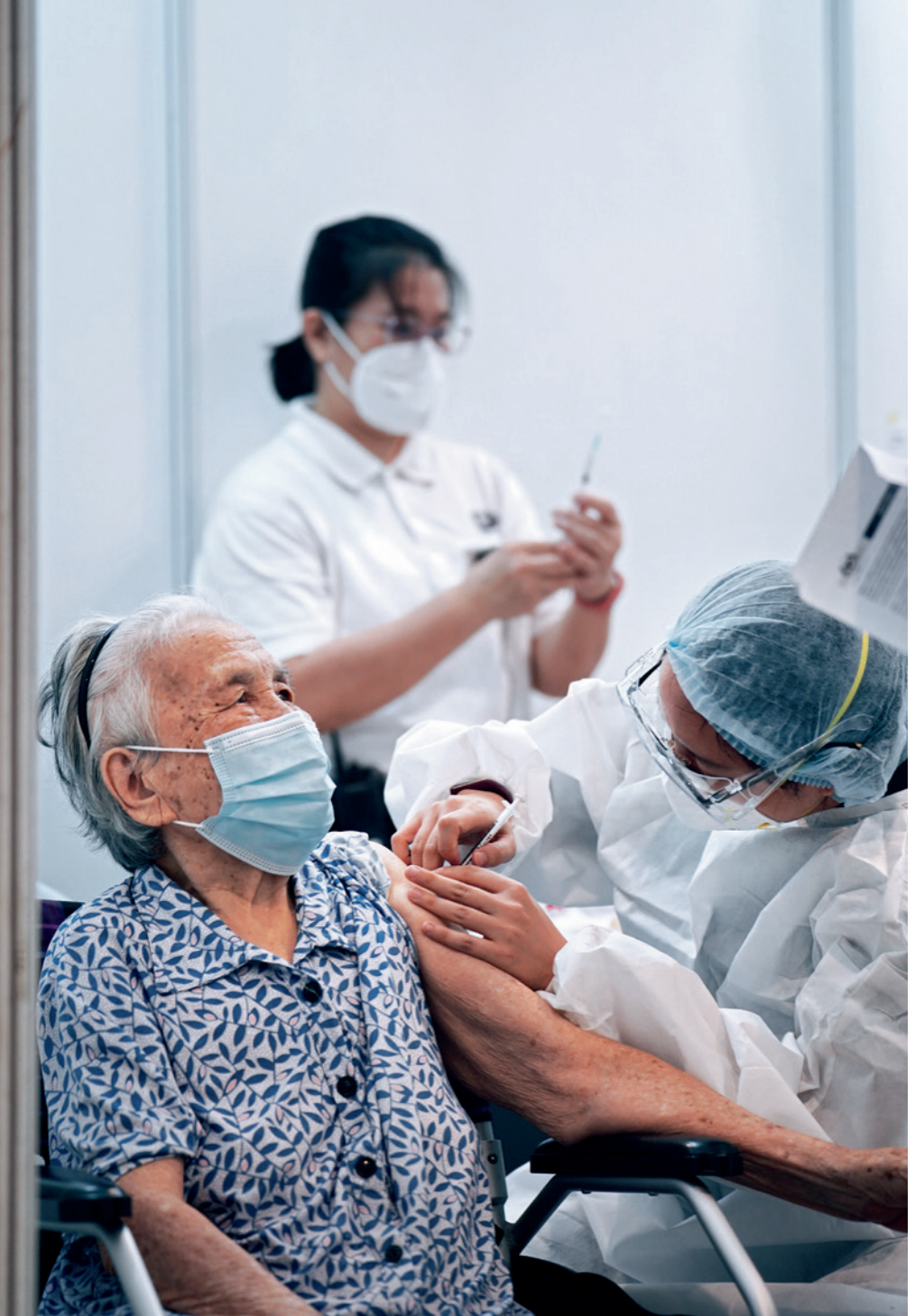
二カ月余りコロナ禍警戒レベル3が続いたが、台湾はようやく市中感染のリスクがやや下がりを見せてきた。ところが、変異株は既に海外で全世界を席巻している。ワクチンの保護力には限りがあり、医療体制が崩壊に瀕する状況が各国で現われている。感染拡大を抑え込むのは難しく、慈済は支援活動に気を緩めていない。

新型コロナウイルス感染症（COVID－19）が全世界に蔓延し、去年七月だけで八百万人が新規感染した。それが「制御不能」というなら、今年の七月は「失速」である。新規感染者数は千五百万人の大台を突破し、死者二十六万人を超えた。八月に入り、タイ、マレーシア、日本、韓国で一日の新規感染者数が史上最高を記録した。

今回の失速の要因は、強い伝染力を持ち、ウイルス量が多いデルタ変異株の出現である。新型コロナウイルスが全世界に広がったこの一年半の間に、いくつかのワクチンが世に出て接種され、ようやくコロナ禍が落ち着いてところへ、変異株が出現して、コロナ禍が再び厳しさを増した。特に、デルタ株が迅速に百以上の国に蔓延して主流になってしまったのだ。世界保健機関（WHO）は、コロナ禍が「非常に危険な時期」に突入していることを全世界に警告した。

たとえ、二回ワクチンを接種し、十四日間以上経っている人でも、デルタ株には感染する。重症にはならないが、ウイルスの保有量はワクチン接種をしていない感染者と同じように多く、感染力を持っている。それだけでなく、若者の感染状況が年長者より勝っているが、往々にしてこの人たちは無症状で、活動が旺盛なため、あちこちに出かけて、知らない間にウイルスを拡散してしまうのだ。

アジアがこの一波の感染ホットゾーンになっており、インドネシアでは全国に蔓延し、フィリピンのマニラはロックダウンをして医療システムの作動を確保し



ている。マレーシアは五月に爆発的な第三波のコロナ禍が訪れ、東南アジアで一人当たりの平均感染率が最も高い国の一つになった。ロックダウンを実施した後も、毎日一万人以上が新規感染し、重症患者病床の使用率が飽和状態に近づいている。

どの国も同じで、感染者数が急増することで病床と呼吸器、酸素が不足し、医療体制が逼迫して、崩壊の危機に瀕するようになる。入院できない患者は病院の外や家で苦しみながら、貴重な空きベッドや一口吸うのも贅沢品となった酸素を待ち続けるしかないのだ。

気を緩めない防疫
途切れることのないケア

台湾本土のコロナ禍は七月になって明るい兆しが見えてきた。幾つかの市中感染経路が断たれ、七月二十七日に台湾全土の警戒レベルを3から2に下げたが、部分的に厳格な措置を保留した。外出時にはマスクを着用し続け、ソーシャルディスタンス

●マレーシアのクアラルンプール静思堂で新型コロナウイルスワクチンの接種を終えた女性。慈済は初めて、この国の新型コロナウイルスワクチンセンタープロジェクト（PICK）に参加したNGOである。皆でワクチン接種率を上げよう。（撮影・文偉光）

●ネパールは４月からデルタ株が広がり、医療体系でコロナ禍を防ぐことができなくなってロックダウンしたが、貧困世帯の生活は苦しくなった。慈済はネパールを防疫援助の重点国の１つに入れ、大量の医療設備や防疫物資を寄贈すると共に、現地の慈善組織「ネパールの足跡（Track Nepal)）」や「天華仏学会（Byoma Kusuma Buddhadharma Sangha)」と連携して、ロックダウンが解除された６月と７月に、首都カトマンズ及び辺境の山間部で５千世帯に食糧パックを配付した。

を保つなど、防疫に気を緩めていない。

域内感染が爆発的に起きて以来、慈済基金会の防疫貧困支援は、大きく分けて四つの方向に向けて進められた。医療防疫物資の寄贈、病による貧困支援、ワクチン接種会場の支援、子供の安心修学計画などである。コロナ禍の緩和につれ、医療の受け入れ態勢も徐々に整い、防疫物資の寄贈が一段落した後、コロナ禍による貧困世帯への支援と安心修学計画に向けて取り込む方向に転換した。

夏休みに入り、慈済と台湾全土十五の県と市が連携した、「弱者家庭の児童への夏季栄養支援プロジェクト」は、警戒レベル3を守って、安心生活ボックスの梱包作業を台湾全土の慈済職員たちが中心となって行ったが、一部の県や市のトップクラスの人も協力してくれた。そして、健康野菜果物ボックスは地方政府が地域の小農家や農協などと共同で行い、一部の県や市はそれぞれの事情に合わせて本体の代わりに引換券を配り、慈善好意にもっと弾力を持たせるなど配慮した。支援を受けた家庭もその思いやりを感じ取った。

この他、学童ケアの「登校はしないが、学び続ける」中で、慈済は「学生サポーターのオンライン学習伴走」プロジェクトを打ち出した。アルバイトしながら学業を続ける方法で生活に困っている大学生をケアする一方、子供たちが学習を疎かにしないよう、オンライン学習に付き添うことで都会と田舎のデジタル教育の格差を縮めている。また、慈済は華碩（ASUS）文教基金会と連携して五千台のノートパソコンを順次各自治体に寄贈し、偏境に住む弱者家庭の子供たちもデジタルツールを使ってリモート学習についていけるようにしている。

海外支援では、インドと周辺七カ国の支援プロジェクトが最終段階に入り、酸素濃縮機、呼吸器、酸素タンク、救急車など、主要な医療設備が逐次到着している。インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、ミャンマーなどコロナ禍が厳しい国では、慈済ボランティアが各政府の防疫規制を守りながら、医療物資の寄贈や生活困窮配付などの活動を展開している。中でもマレーシアとインドネシアでは医療機器を医療機関に寄贈することを優先し、その次に弱者層へ食糧による生活困窮支援を行うことで、命を救うことに尽力している。（慈済月刊六五八期より）

「台湾の愛・心を一つに防疫しよう」ウェブページ
慈済援助活動と寄贈物資の内容が示されています

台湾とグローバルの防疫を応援しよう

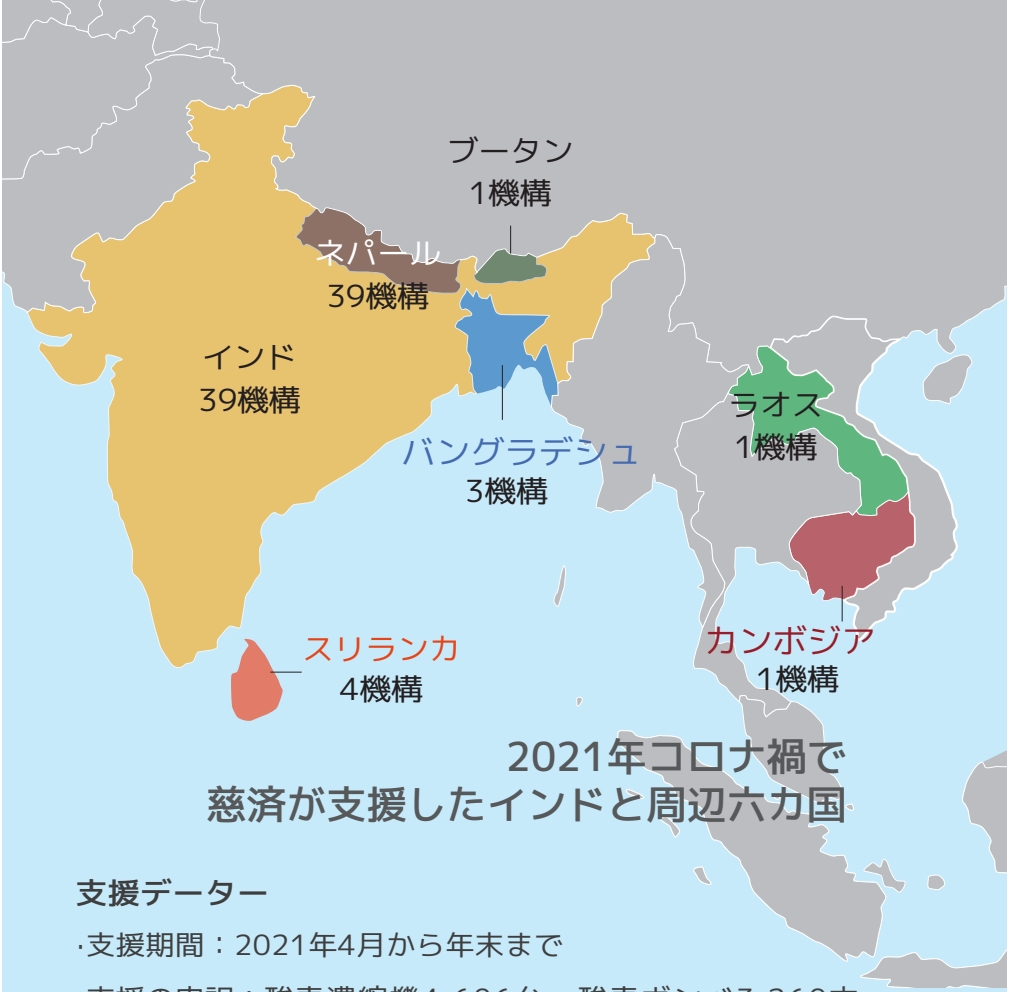
爆発的なインドのコロナ禍・国境を超えて

ひと呼吸の間にある命を救う

◎文・葉子豪　写真提供・花蓮本会　訳・惟明

高原の国を援助、あらゆる難関を乗り越える

アジア諸国のコロナ禍がリバウンドし、インドの北側に隣接している人口三千万の高原の国ネパールに、インドの第二波が波及した。五月の一カ月間で、毎日五千人を超える新規感染者を記録し、死者も鰻登りに増えた。その原因は多くのネパール人が国境を越えて、インドで十二年に一度開催されるクンブ・メーラ等の宗教行事に参加する巡礼の旅をして、ウイルスを持ち帰ったのである。感染拡大のスピードが余りにも速く、国際メディアはネパールが、「ミニ・インド」になる可能性があると報道した。



2021年コロナ禍で慈済が支援したインドと周辺六カ国

支援データー

- 支援期間：2021年4月から年末まで
- 支援の内訳：酸素濃縮機4,606台、酸素ボンベ3,260本、人工呼吸器959台、医療用マスク5,522,500個、医療用手袋2,004,450枚、防護服262,260着、シューズカバー36,260足、防護フェースシールド210,650個、総計902万件の医療機器と防疫物資をインド等７カ国88機関に支援。
- 食糧支援：計画では、92,294世帯を対象として、65,000食以上を提供する予定。

（資料提供：慈済基金会　統計：2021年6月12日現在）

慈済は五月上旬ネパールのトリブバン大学教育病院（Tribhuvan University Teaching Hospital）から医療機器を支援してほしいという要請が入った。何日もかけて価格の問い合わせや輸送の手配を経て、人工呼吸器五台と医療用手袋七万枚が病院に届けられた。ディビヤ院長（Dr. Dibya）は、人工呼吸器によって多くの重症患者が救われたことを報告し、慈済の寛大な支援に感謝していると言った。

慈済は複数のチャンネルを通してネパールの複数機関と連携して、医療器材、防疫物資を寄贈したほか、現地の慈済ボランティアと連絡を取って、支援物資のニーズを確認した。「邱揚（チウ・ヤン）師姐は首都カトマンズで物資を買い付け、辺鄙な所にあるマナング地域病院（Manang District Hospital）に届けましたが、車で十七時間もかかり、容易ではありませんでした」。本部でネパール支援を担当している劉勁寛（リウ・ジンクアン）さんは、険しい山道を通って支援物資を送ることの困難さを話してくれた。幸いに酸素濃縮機、パルスオキシメーター（血中酸素濃度測定器）、非接触型体温計などの支援物資が、五月十九日にマナングに届いた。

マナング地区への支援物資は、ネパール国内で買い付けたものだが、ネパールは製造業が発達していないため、医療機関が必要としている他の医療機器等の支援物資の多くは国外から輸入する必要がある。その時、「世界の工場」と言われる中国に住んでいる慈済ボランティアたちが、買い付けと輸送の大任を担ってくれた。

ヒラヤマ山脈
支援の道は困難でもやり遂げる

ネパール行き最初のチャーター便は、五月二十四日に蘭州から飛び立つ予定だったが、予定の物資の生産基地は二千キロ離れた上海に近い昆山市にあり、昆山のボランティアがその「大変」な荷積任務を担当した。

「百箱余りの物資をトラックに積もうとした時、物流会社のエレベーターが故障したので、ボランティアたちは三階から一階まで一箱ずつ運んで、トラックに載せました」。劉勁寛さんによると、輸送過程のチャレンジはそれだけではなかった。物資を楊子江南岸の昆山市から陸送で河西回廊の蘭州に運んだ後、ボランティアに再び変化球が投げられた。防疫

を考慮して、本来ならチベット高原を飛び越えてネパールに直行する航路が変更されて、先ずカンボジアに飛んで消毒した後、ネパールに飛ぶことになったのだ。一回目のチャーター機の後、七回のチャーター便全てが直行便から中継地を経ることになった。「チャンネルがあっ

●厳しいコロナ禍の中、カミロ修道会の修道女たちは慈済と協力して、低層の最も貧しい家庭が充分な食糧を得て難関を乗り切るために、物資を配付した。

て、成し遂げることができれば、我々としては感謝する以外にはありません」と、劉さんが言った。

ネパールの現地ボランティアと当国衛生部、各協力団体の協力の下に、慈済からの支援物資が六月中旬、全国三十九の宗教、医療、慈善等機関に届けられた。市内の病院が酸素濃縮機等、急を要する救命設備を受け取っただけでなく、ボランティアたちは、それらの物資を車でも行き着けない辺鄙な医療ステーションにも送り届けることを計画した。

「マナングは標高三千メートルですが、その病院は標高四千二百メートルのところにあります。五月中旬に物資が届いた後、彼らはロバを用意して上まで運びました」。熊副執行長によると、協力機関は慈済の支援物資を山岳地帯にあるもっと遠い五つの村に届けるつもりだった。残念にも五月十九日にネパール中部でマグニチュード五・八の強い地震が発生し、山道に影響したばかりか、連日の大雨でロバ隊が山に登ることができなくなったのだ。結局、プロの「ポーター」が人力で歩いてそこまで運んだ。「どんなに山が高くても、道が険しくても、成し遂げなければならないのです」と熊副執行長が躊躇することなく言った。

法師の協力で、仏の生まれ故郷を支援した

大量の物資を支援したのは今年五、六月のことである。地域に根付いた「現地雇用を救済に替える」という被災者雇用計画が、今年正月から既に始まっていた。仏の生まれ故郷であるルンビニーを支援する為に、慈済はルンビニー国際仏教協会と共同で、学校の教師や学生に提供する布製マスクの作成職業訓練プロジェクトを進めた。その結果、学生たちも基本的な防護ができるうえに、家庭の女性たちの収入源にもなった。

五十五年前に證厳法師が三十人の家庭主婦を集めて慈済を創設したように、ルンビニー国際仏教協会のマイトリ法師(Bhikkhu Maitri)が女性たちの布製マスク作りを始めたのも三十数人からだった。熟練してくると、その三十数人は十二日間に二万個のマスクを作り上げた。学生や先生一人につき二枚で計算すると、一万人の生徒と教師が恩恵を受けた。

試作が良かったため、マイトリ法師は生産規模を拡大し、四月下旬から布製マスクの職業訓練プロジェクトを一つ県から三つの県に拡大した。「しかし、その時から感染が大きく拡大し、布製マスク

●カミロ修道会の神父と修道女の多くは医療背景があり、厳しいコロナ禍の中、4月末から志願して病院に入って、最前線で患者をケアした。第1、第2陣が続々と安全に帰還した。

を一部作っただけでロックダウンに遭遇し、プロジェクトに参加した九十六人の女性はコミュニティセンターに来ることができなくなったため、法師は彼女たちの家にミシンを届けました」。法師と連絡を取り続けていた劉さんによると、彼女たちは裁断や裁縫を休んだことはなく、布製マスクの生産ラインは保たれていた。学校が休校し、学生は家で学習することになったので、出来上がった布製マスクを現地の治安当局に寄贈した。

四月下旬から五月にかけて、マイトリ法師は既に慈済の資金援助で仕入れた防護フェースシールド、医療用手袋、消毒液等の物資及び女性たちが作った二万個の布製マスクをルンビニー警察署や町長事務局、カピラ国境警備隊等八つの政府と民間機関に送り届けた。

五月初め、ルンビニ市政府は慈済に、隔離センターを援助してほしいと要請し、心電図機器等の医療設備の支援を求めた。しかし最初、花蓮の慈済本部にいる担当者たちは、「何故、隔離センターに医療級の機材が必要なのか」と不思議に感じた。

ルンビニー国際仏教協会施療センターの責任者であるマイトリ法師の話を聞いた結果、将来、隔離センターがクリニックとして運営されていくことになっていると分かった。本部の担当者も慈済医療志業の林執行長と慈済マレーシア支部のボランティア医師に相談して、順調に支援計画を立案した。マイトリ法師は先ず

布製マスク作りプロジェクトの余った資金を使って病床と心電図機器などの重要器材を購入した。

法師の尽力で、慈済は仏の生まれ故郷であるルンビニーでの防疫支援活動を順調に素早く進めることができた。互いの縁は最近始まったものではない。マイトリ法師は、三十年前に国際仏教青年会の活動参加で台湾に来た時、慈済を訪れたことがあり、また、二〇一五年のネパール大震災の時、災害支援に来た台湾とマレーシアの慈済ボランティアとが縁を結んだ、と言った。この前後数十年にわたった経過が、「縁が深ければ、遅れてくることを心配する必要はないのです」という證嚴法師の言葉を実証している。

●

五月三日以来、花蓮本部の担当チームは毎日会議を開き、一つ一つインドやネパール等七カ国が緊急に必要としている医療物資の品目と数量を確認し、毎晩、ネットを通じてインドとネパールの各組織と連絡を取り、最新状況を把握している。各地でロックダウンや国際便が運休する困難な状況の中、物資や機器を第一線に届けられる方法を探し出している。

ロックダウンやワクチン接種等措置が進められ、インドとネパールの感染状況は六月以降改善を見せているが、依然として百万人以上が苦しんでいる。従って、慈済ボランティアの支援活動は続けられており、酸素濃縮機や人工呼吸器、酸素ボンベなどの支援物資は、中国、インドネシア、マレーシア、シンガポールのボランティアが調達を続け、必要とする国々に送り届けられている。

菩薩の縁でもって、苦難にある衆生と縁を結び、仏の故郷に苦難があれば、遠くても支援する。インドなどの防疫支援に関して、證嚴法師は特に、不請の師となって、素早い行動で力になるように、と慈済人に指示した。目下、慈済人と協力パートナーの努力は功を奏し始めている。支援を受けた医療機関は「酸欠」状態が改善されつつある。最前線の医療従事者の手元に届いた防護服などの医療器材がウイルスに対抗する鎧となっている。これら全ては各方面からの愛が結集して成し遂げた善のエネルギーである。

（慈済月刊六五六期より）

人物誌・厦門

古稀に夢が叶う

慈済という「大学」で学ぶ

●75歳の王さんは身も心も環境保全を実践することで、異なった人生を歩むようになった。

福建省北部出身の王桂英（ワン・グイイン）さんは台湾のホーロー語が分からず、繁体字も読めないが、静思晨語の中から人生の智慧を理解して、できないことができるようになり、迷いから覚め、「聞く」立場から「話す」立場に変り、携帯電話で会得したものを若い人たちと分かち合えるようになった。彼女は古稀の歳にやっと勉強するという夢が叶った。

◎文・林素玉、李水治（アモイ慈済ボランティア）
撮影・范盛花（アモイ慈済ボランティア）　訳・善耕

信号が青になると、王さんは不自由な脚を引きずって素早く横断歩道を渡った。中背で痩せ型の彼女はリュックを背負い、左手に杖型の傘を持って右脚に合わせて突く。このようにして二十数分間歩いて、厦門（アモイ）市にある慈済の文興東リサイクル拠点に到着した。

軽快な音楽と共に、ボランティアたちは素早く、溜まっていた回収資源を運び出して整理し始めた。王さんもリュックを降ろすと直ちに仲間入りした。しかし、歩く、跪く、座る、立つというどの姿勢も、長くなると彼女にとっては辛くなる。少し動いては休んで楽になるようにして

いる。分別が終わりに近づいた頃に、残った細々したものを見て彼女は捨てるに忍びなく、痛みに耐えながら、地面にリサイクル可能なものがなくなるまで仔細に分別した。

体は日増しに歳と共に衰え、現在、両脚の長さは三センチ以上の差がある。歩く時、左脚の力が益々弱くなり、右脚は左手で突く杖に合わせてもまだ、少し痛む。歩けなくなるとバスに乗るが、初心は変わらず、同じように慈済の志業に励んでいる。

彼女は月曜日に思明道場で当直をし、火曜日は文興東和前埔、水曜日は七匹狼ビルのリサイクルステーションで環境保全活動をしている。決まったリサイクル拠点のほかにも、呼ばれれば、距離の遠い近いに関係なく、八～九つのリサイクルステーションに出向く。

リサイクル活動に始まって読書会が終わるまで、彼女は遅刻も早退することもなく、終始一貫して参加している。ボランティアたちが資源ごみの回収に出かける時、彼女は證厳法師の法語を聞きながら、プラスチックと紙の分別作業を行い、たとえ一人でも楽しく回収物を整理する。

「分別作業は、しても痛く、しなくても痛みます。脚は痛くても手は痛みません。歩ける限り、出かけます。それができるのは幸福ですし、少しでも多くのことができれば、それだけ嬉しいのです」と言った。二〇一四年以来、王さんは強靭に、且つ余裕を持って、ボランティアの道を歩んでいる。

固い意志で学び続け、困難を乗り越えた

王桂英さんは一九四六年、福建省南平市浦城の貧しい家庭に生まれ、老いるまで一膳の白いご飯が食べられることを期待して、十八歳で嫁いだ。次々と子供を産んだが、夫は結婚して二年がたつ頃から毎年病気をするようになった。

「私は五十キロ入る天秤棒に三十キロ入れて担いで、この家庭を支えているようなものです」。王さんは一切の家事をするだけでなく、早朝に野菜を売り、他人の洗濯や子守りもした。また、他人が不要になった四十キロ余りもある古ミシンを喜んで貰い受け、四キロ余りの道のりを担いで持って帰り、洋裁を学んだ。

子守りの仕事で生活は徐々に改善し、三人の息子のうち二人が大学を出た。王さんはある家族に信頼されて、高齢者の

王さん（上の写真・右1人目）は定期的に地域のリサイクル拠点でボランティアをし、体に痛みを抱えていてもそれを表には出さない。彼女は福を惜しんで物を大切にし、ボールペンの芯も一本ずつ残量があるかどうかを確認する。彼女のノートとペンは全てリサイクル品である。

ケアを頼まれた。

お年寄りの家で『家庭生活万宝全書』という本を見た時、彼女は夫の体調に思い至り、素晴らしい本だと感じ、保健に関する知識を学ぶために、自分も一冊購入した。知らない単語があった時は、お年寄りに辞書の引き方を尋ねた。

残念なことに、お年寄りの数人の子供が王さんは何か企んでいると誤解したため、彼女は耐えきれなくなって、二年と八カ月働いた後、一九九六年八月で別れを告げずに立ち去った。

二〇〇〇年三月、彼女はあるアルバイトの仕事で右脚を挫傷し、牽引療法を行ったが良くならず、三カ月後、大腿骨が壊死しているのが分かったが、既に回復の見込みはなく、生涯にわたって障害が残るようになった。その後の三年間、彼女は『家庭生活万宝全書』に頼って激しい痛みに耐えながら、自分でマッサージなどの理学療法をする傍ら、アルバイトで生活を支え、強い意志でもって辛い日々を乗り越えた。

法を聞きながらノートに取ることで志を鍛えた

娘が故郷で嫁ぎ、三人の息子は前後し

て別々の都市で結婚して所帯を持ち、夫は二〇〇八年に亡くなったため、彼女は二〇一三年に厦門に住んでいた息子の張衛國（チャン・ウエイグオ）さんと一緒に暮らすようになった。

「お母さん、たまには慈済に行ってみたらどう?」と慈済ボランティアである嫁の徐斌（シュー・ビン）さんが、一日中他郷にいる子供たちを気に掛ける彼女の姿を見て言った。何回か行った後、王さんは、慈済には規則が多過ぎると感じ、「もう歳なのだから、気ままに過ごしたい」と思った。

しかし、ボランティアは彼女に、「師姐（スージェ）、ここに来た以上、ここを自分の家と思ってください。何かしたいと思ったら、好きなようにしていいのですよ。他の人がどのように見ても、気にしないでください」と言った。彼女はそれを聞いて、その時から人の指示を待つことなく、仕事するようになった。「早く来れば、花に水をやったり、テーブルを拭いたりし、次第に慣れて行きました」。

一念の單純な心で「まだやり残したことがあるだろう」と心にかけていた彼女は、脚の痛みに耐えながら、二〇一四年十月に開かれた厦門国際仏事展覧会で慈済のボランティアとして最初から最後まで参加し、次いで文博会にも参加した。十日間連続で疲れたが、楽しかった。

その後、昼夜を分かたず慈済の活動に参加し、呼びに来た人や仕事の内容に関わらず、彼女は全て「オーケー!」と応え、呼ばれない時は自分から出向いた。環境保全だけでなく、厨房係、清掃係、読書会など、彼女は何でもやり、何でも学びたいと思った。「縁がめぐってきたのでしょう。もう、慈済の規則の多さを気にすることはなく、ただゆっくり学びたいだけなのです」と笑顔で言った。

二〇一六年七月十三日、ボランティアの林玉蓮(リン・ユーレン)さんの誘いで、王さんは「暁に目覚め、法の香りに浸る」活動に参加し始めた。彼女は福建省北部の出身で、ホーロー語が分からないばかりか、繁体字も読めないが、いつも前夜から翌朝の法語を楽しみにしていた。

小学校三年生も終えていない王さんにとって、聞きながらノートを取るのは容易ではなかった。完全な語句が書けない時は、先ず字を幾つか書き、画面の繁体

字を見て、それを簡体字で書いた。字が出てこない時は、空白のままにして、後で拡大鏡を使って辞書を引いて補った。「メモを取るのは練習する機会であり、心が落ち着く機会でもあるのです」。

テーブルの上には大小様々な十数冊のノートが置かれてあった。それらは、彼女が四年間、途切れることなく学習した証である。今、彼女はホーロー語の八～九割が理解でき、八割以上の繁体字が分かる。

二十数年前、王さんは学校で勉強している夢を見た。思いも寄らず、古稀になってから勉強する夢が叶った。「上人は私にとって生まれ変わりの母親であり、私に身の処し方を教えてくれています。私にとって慈済は学費の要らない『大学』なのです」。彼女はこの幸せを大切にしており、それを愛に変え、日常生活に応用している。

体は労働で疲れても、心はブレない

「彼らは外の福田を耕し、私は我が家の福田を耕しています」。王さんは、息子と嫁が慈済に精を出しているので、自

王さんは学ぶことが好きで、読書会にも「暁に目覚め、法の香りに浸る」活動にも参加している。小学校3年生までしか勉強していなかったため、説法を聞いてノートに取ることは大変だったが、今は既に余裕を持って皆についていくことができる。

分が家庭を支えなければならない、と言った。早めに家に帰るといつも、洗濯をしてモップで床を拭く。「違うことをするのは休憩になりますし、人を助けることは自分を助けることなのです」。彼女は法師の教えを心に刻み、体の機能をあまず所なく発揮し、「善と愛を家伝にする」ことを願っている。

「静思語は心のゴミを取り除いて、広くしてくれます」。彼女は「慈済に参加してから、どうすれば自分の心をほぐすことができるかを学びました」と語った。

『相手はこういう性格だから、私にだけこういう態度ではない』。自分に対して厳しい言葉が飛んでくる時、母は逆に、マッサージしてあげたり、自家製の蜜蝋クリームを贈ったりして、良縁を結ぶようにしています。これが上人の言う『福とは行動する中から喜びを得、慧とは善に解釈することから自在になること』なのです。母は法語を生活の中に生かしており、母こそが私の模範です」と息子の張さんは言った。

家で息子が仕事のことで困っているのを見ると、王さんはいつも彼に良縁を多く結ぶよう勧める。嫁が戻ってきて、「今日は本当に疲れたわ！」と、さりげなく言った言葉が王さんには聞き流せなかったので、軽く、「上人のことを考えなさい」と添えた。そのような正念がすぐ心に湧き起るからだ。夫婦の意見が合わない時、彼女は「直ぐに『四薬膳スープ』㊟を飲みなさい」とも言うそうだ。

彼女は絶えず自分に「正信正念」と言い聞かせている。これは「慈済」大学で学んだ薫陶と実践によって、塵に覆い隠されていた彼女の心に光が芽生え、輝くようになったからである。

王さんは、二十年間苦痛に悩まされて来た脚に対して、心から懺悔した。「当時は感謝の気持ちがなく、心が狭すぎたのです！不当な扱いを受けると、直ぐに辞めてしまい、お年寄りの世話を最後まですることができませんでした。脚が痛むのも自業自得です」。彼女は恨まず甘んじて受け入れ、常に心を広く持つよう自分に言い聞かせている。

「自分でリラックスすることを学ぶに

㊟四薬膳スープ：知足（足るを知る）、感恩（感謝）、善解（何事も善に解釈する）、包容（受け入れる）

は、より多くのことをしなければなりませんが、考え過ぎず、体を使って労働し、心が揺れ動いてはいけないと思っています。自信を持ち、全てに完璧を要求しないことです」。歪んだ手書きのノートは三年前に彼女が書いた法師の開示である。彼女はこの部分がとても好きだ。「私はこれを読むたびに、心が一層落ち着くのです」。

生活の中で、王さんは物を大切にして

●王さんは絶えず息子さんとお嫁さんと「正信正念」について分かち合うので、家庭内の雰囲気は温かく幸せである。他郷で生計を営む子供たちにとっては心配が祝福に変わった。（撮影・曾美）

福を惜しんでいる。「私は何でも食べ、時に少し酸味を感じても食べてしまいます。捨てるのが勿体無いのです」。慈済のユニフォーム以外、服は殆ど人からもらった古着を手直ししたもので、靴下も破れたら繕って履き続けている。「いつか私がこの世を去っても、こうすれば勿体なくないからです」。彼女は、リサイクル活動に参加してから、自分の考えが法師の理念によく似ていることに気づいた、と言った。「慈済こそが私の歩むべき道なのです」。

「二十年間もこの両脚が使えたことに感謝しています」。王さんは両脚をとても大切にしている。毎朝三時過ぎに目覚めると、ベッドに横たわったまま、両脚を左右に回転させ、腹部をマッサージし、指で髪をとかす…などして健康体操をする。夏でもズボンを二枚履いて、外出する前に脚に生姜の膏薬を貼り、右側の靴に厚さ三～四センチの中敷きを入れる。そうやって、彼女はびっこを引きながらも、環境保全の道をしっかりと歩んでいる。古稀になって「大学」で学ぶ夢が叶い、着実に智慧の溢れる人生を歩き出したのだ。（慈済月刊六五三期より）

その地に立って天を頂く

その土地に暮らしているのであれば、
発願して社会の責任を担うべきです。

◎文・釋徳仉／訳・済運

人材を養成することは、希望を培うこと

タイのチェンマイ慈済学校は、創立十七年を迎えようとしています。慈済の道徳教育と学校運営の成果はチェンマイ州から認められ、教育模範機構賞を獲得しました。七月十六日、殷文仙（イン・ウエンシェン）校長と教師及び職員たちはオンラインで、「コロナ禍の下で、学校は休校になっても、学びは止めない」ことに関して報告しました。

それによって親も子供の側で学ぶことができ、特に慈済人文科目は小規模の「愛を広める活動」のようになり、親はより慈済を理解して関心を持つようになっています。

昨年のこの学校の進学実績はとても良く、全国で二番目に優秀な大学に合格したり、慈済大学や慈済科技大学に進学した学生もいました。チェンマイ慈済高校の卒業生は既に第八期生になりましたが、第四期生は既に大学を卒業して就職していて、母校に戻って教職に就いている人もいます。

艾順琴（アイ・シュンチン）さんはタイ北部の回賀慈済村出身で、父親の意志でチャンマイ慈済学校に入りました。最初の頃は、毎日泣いては家に帰りたがっていた彼女でしたが、今は中国語の教師になっています。高校と大学の時、数多くの人の世話と支援を受けましたが、父親が亡くなった時は葬式のために帰ることはできません

でした。しかし、慈済が彼女に愛を与えたことで、早い時期に立ち直ることができ、感謝の気持ちを携えて学校の教職に就いたのです。

上人はこう言いました。数多くの卒業生が学校に戻って職務を全うしている光景は、一粒一粒の種が大樹に成長したようなものであり、これからも現地の社会に幸福をもたらすことができるのです。ですから、人材を育成するということは、希望を培うことなのです。今、チェンマイ慈済学校は、小学校一年生から高校三年生まであり、更に一歩踏み込んで、技術短期大学や大学ができることを期待しています。台湾での教育志業が一貫教育になったように、整うことを願っています。

「大きく発心して立願し、自分に自信を持つことです。既にその土地で暮らしている以上、発願してそこで責任を果たすべきです。人材育成の責任を担うのであれば、慈済精神を継承し、恒久な大愛を広めて、現地に最も大きな希望をもたらさなければいけません」。

人材育成では感謝の心が最も重要

七月二十一日、教育志業の幹部職員が上人と座談しました。慈済大学のメンバーはＡＩ（人工知能）を使った医療画像の自動判読システムの開発、及び慈済大学と南京中医大学がオンラインで夏季のセミナーを行ったことについて報告しました。また、慈済科技大学看護学部はコロナ禍の下での看護教育と業務の発展、原住民の学生の生活と教育ケアについて報告しました。

上人は、光陰矢の如しと言われるように、時間は放たれた矢のように素早く流れて行くため、真面目に時間を捉えて大切に使い、軽々しく怠けてはいけない、と開示しました。時間が過ぎ去り、時代の変化も速く、現代科学技術は発達し続けていますが、どんなに科学技術が発達しても、人心が善に向かう方向が逸れてはなりません。少しでも逸れれば、「毫釐の差は千里のあやまり」になってしまいます。

世界で起きている放火や暴力、略奪などの動乱を見ても、国が安定しなければ、人々の生活はとても苦しいものになってしまうことが分かります。多くの人は懸命に働いて貯めた長年の蓄積が放火によって何もかも失っています。元来は何もなかった状況下で、少しずつ積み重ねてきたものがまた、無に帰してしまい、再び努力しなければならなくなるのです。人生はいつも循環する中で、行ったり来たりするため、苦しいものですから、台湾の社会を振り返り、不安定な国と比べると、本当に感謝すべきです。

上人によれば、教育は先ず、学生に感謝の心を培うべきなのです。長年の教育を経ても、感謝の心が芽生えなければ、将来、社会により大きな不安要素をもたらすことになります。感謝の心がなければ、知識人となっても面倒を引き起こしかねず、様々な問題からこの世に禍をもたらしてしまいます。

「学生が教育を受け、愛の心を培って、常に感謝の心を持てば、自然と善業を造るようになります。人と人の間で心を静めて穏やかになり、互いに感謝し合うのが、この世で最も美しい境地なのです。この境地は教育から来るもので、誰もが事理明白になってできてこそ、生命を愛し、守ることができるのです」。

仏教は自然の道理を説きますが、慈済は仏法を実践して菩薩道を歩みます。慈済の大愛は百以上の国に及び、それによって慈済人は世の諸々の苦難を目にしてきました。上人は、子供たちが苦難を見て学ばなければ、自分たちが幸福であることを知ることはありません。世の中の苦難を知らなければ、足ることを知る心も生まれず、心に欠如した部分ができてしまいます。人生で外部に対して求めるだけであれば、心は虚しいものになり、安定感がありません。一歩ずつ着実に歩んでこそ、正しい道を進むことができます。時間は僅かでも留まってくれませんが、時間をかけることで美しい善が完成するのです。（慈済月刊六五八期より）

十月の出来事

訳・済運

10・01	◎インドネシア慈済病院が本日、正式に開業し、一般外来と入院などの医療提供が始まった。病院は6月14日に感染予防対策センターが運用され、新型コロナ感染症の患者を受け入れると共に、病院ボランティアの養成と試験運用など準備を行なってきた。9月30日には慈済ボランティアと医療チームで祝賀行事が行われ、病院建設に尽力してくれた人々に感謝した。 ◎慈済基金会はハイチ地震災害支援活動を続けている。9月にレカイ市で、本日、ボーモン市でも2100世帯に対して物資の配付を行い、合わせて衛生教育を実施した。
10・02	慈済基金会は高雄科技大学の要請を受けて、慈済フィリピン支部の代表が当大学のオンライン討論会に参加し、慈済の台風ハイエンにおける災害支援の経験を共有した。この討論会は、日本の神戸大学が2018年にユネスコに、災害リスクにおける性別の平等と弱者ケアに対する探求と推進を行う、4年間のプロジェクトを申請したのがきっかけである。運営は5カ国からの6チームが行い、高雄科技大学もそのうちの1つで、今年は主催者である。
10・05	台風15号がタイを襲い、30の省で水害が発生し、中部地域が最も大きな被害を受けた。慈済タイ支部は本日、ロッブリー県チャイバダン地区とバーンミー地区で被災者に米と即席麺、食用油など生活物資及び清掃用品、薬品パックを千世帯に配付した。14日にラムソンティ地区で千7百世帯分の生活物資を配付すると共に、その他の3つの村に薬品と米を被災者に届けた。

10・07	慈済ベトナム支部は新型コロナウイルス感染拡大期間、医療物資の支援活動を行なった。7日と9日、10日にホーチミン市赤十字社とビンズオン省外事庁に委託して、呼吸器と酸素濃縮機などの設備及びマスク、防護服などを病院に届けた。この他、ハノイ市の慈済ボランティアは8日にタインスアン区で貧困救済への配付活動を行った。米とフォー、食用油、マスクなどが入った3百世帯分の生活物資がニャンチン坊とタインスアンチュン坊の貧困家庭に届けられた。
10・08	◎シエラレオネのフリータウン・クルーベイ地区で9月19日、火災が発生し、110世帯余りが被災した。慈済基金会はカリタス基金会と協力して、被災地で炊き出しを行い、本日までに延べ8千5百食を提供し、被災者雇用による復旧活動には延べ298人が参加した。 ◎慈済大学医学科学研究所は、花蓮慈済病院と国家実験研究院の国家高速ネット計算センターと協力して、初めて校内に「高等生医情報技術及び分析技巧研修課程」を設け、30数人の医療、看護スタッフ及び学生が参加した。これは2020年5月に慈済と国家研究院が交わした覚書の中の学術研究と医療を結合した協力項目に当たる。
10・12	2021年「印證仏学講座」の2回目がアメリカハーバード大学の主催で開かれ、慈済基金会の何日生副執行長がオンラインで「歴史的視野で考察する仏教の未来：慈済宗の発展」を講演した。
10・14	14日未明の3時過ぎ、高雄市塩埕区にある、雑居ビル「城中城」で火災が発生し、死者46人、負傷者41人を出した。慈済ボランティアは社会福祉人員と共に現場に急行して見舞った。そして、付近の駐車場を借りて災害救助センターを立ち上げ、食事や飲料、休息場所を提供して、警察や消防隊員の体力補充に役立てると共に、消防署の要

	請に応じて遺体袋を提供した。その他、葬儀場で死者に対する助念（霊を宥める念仏の手伝い）をして遺族に寄り添った。
１０・１５	慈済医療財団法人の２０２１年慈済医学年次総会が、花蓮慈済病院の主催の下に、「中西協調、クリエイティブな研究開発、智慧を伴った医療、健康を守る」というテーマで、１５日から１７日まで慈済大学で開かれた。各種研究プロジェクトの発表や医学教育デー、テーマ討論会と講演及び中医薬学術フォーラムなど延べ約６０の活動が行われた。
１０・１６	◎慈済基金会２０２１年の新芽奨・助学金授与式が、新型コロナウイルスの感染予防のため、対面やオンラインでの授与式、そしてボランティアが自宅に届けるという３つの方式で行われた。本日、高雄市が率先して、静思堂とコミュニティーのリサイクルセンターで小規模の授与式典を行い、一部の地域ではボランティアがそれぞれの家に、奨助学金を届け、祝福した。 ◎慈済骨髄幹細胞センターは「溢れる髄縁」をテーマに、オンラインで創設２８周年記念行事として、対面式とケアチーム講師認定講座が行われ、千３百人近い骨髄寄贈ケアチームのボランティアが参加した。 ◎慈済基金会と慈済科技大学は共同で「第５回全国慈悲の科学イノベーション・コンペティション」を開催した。コロナ禍の影響で、本日、決勝活動をオンラインで行うことにし、大学院から高校生までの合計２５組が参加して、作品の展示と解説を行なった。
１０・１８	財団法人厚生基金会は第３１回の医療奉仕賞の受賞リストを公表した。慈済医療財団法人の林俊龍執行長が個人医療奉仕賞に輝き、慈済大学名誉教授の葉金川氏が特殊貢献賞を獲得した。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 ＃ 4002
0912-412-600 ＃ 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段２４８号
TEL:886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ニューヨーク支部
（New York）
TEL:1-718-8880866

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス London
TEL:44-20-88699864

フランス Paris
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈済

２０２１年１１月１７日発行・２９９号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@daaitv.com

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

ハイチ地震　慈済が支援に駆けつける

8月中旬、ハイチ南西部でマグニチュード7・2の地震が発生した。被災地では家屋が倒壊し、深刻な食糧不足に陥った。その上、コロナ禍と長年の政情不安により、災害支援には難題が立ちはだかったが、慈済の支援チームは9月に第1段階の大規模な配付活動を行い、被災者に1カ月分の食糧を届けた。頭に重い食糧袋を乗せ、大きな米袋を持った時には顔をしかめた人々も、これで家族が飢えに苦しまなくて済むと言って安心した。
（撮影・范婷　ハイチ・レカイス市　2021.9.11）

慈済日本サイト　慈済ものがたり